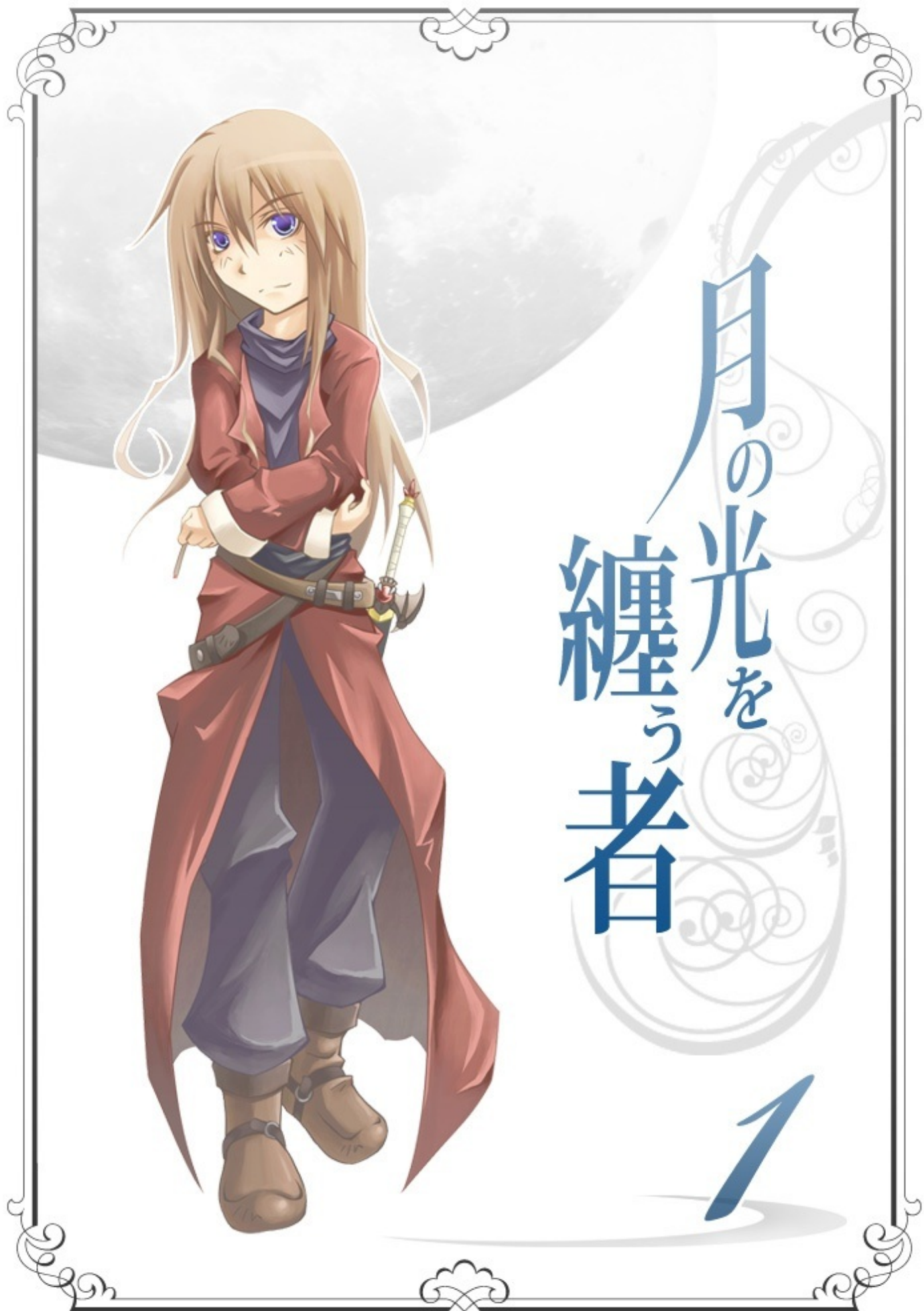




月の光を  
纏う者

1



月の光を  
纏う者

1

## 第00話 雨の夢

---

雨が強くなっていた。

闇も濃くなり視界は殆ど無い。

頭が鈍く痛む。

震える手足は随分と重い。

眠りもせずに丸一日剣を振るっていたのだから当然だろうか。

ここは不気味なほど静かだ。

聞こえて来るのは、雨が土と鉄板を叩く音だけ。

敵も味方の姿も、見当たらない。

もう、誰も居ないのかもしれない。

終わってしまった戦場。

そんな言葉が頭を過ぎった。

タイヤと爆発によって掘り返された大地。

ひしゃげて焦げた軍用車。

時代遅れの魔導師達が残した、地面に刻まれた薄気味悪い魔導式。

瓦礫から覗く人の手足。

ゴムと肉の焼ける匂い。

血と泥が混ざりあった地面は踏み締めるたび、

誰かに足首を掴まれているかのように、しつこく絡み付く。

酷い有様だが、それは今の時代何処にでもある風景。

だから、何も感じない。

いつの頃からか、それが日常の風景の一部となってしまった。

以前はもう少し何かを感じたような気もしたけれど、忘れた。

とぼとぼと黒い丘を歩く。

自分達を戦場まで運んでくれたトラックは真っ先に壊され、

辺りに使えそうな車は残っていない。

遠く離れた街へ帰るため

疲れきった体に鞭打ち仕方なく歩いているのだけれど、

戦場の外れに来た今でも時折敵兵に襲われる。

敵だけじゃない。味方の兵士にも背後から斬りかかれる始末だ。

皆、生きて家に帰るのに必死なのだ。敵と味方の判別をする余裕も無いのだろう。

そんな自分かというと、今は襲い来る兵士の事より早く街に戻って柔らかいベッドで眠る事だけを考えていた。自分の仕事は、もう終わっているのだから。両軍を共倒れさせるという目的は、もう十分達成されたと言っていいだろう。

そこで、ようやく自分がやっている事を思い出した。この戦争から、勝者も敗者も生み出さない事。誰にも平等に、実りの無い不毛で虚しい結末ばかりを届ける事。こんな事をしていても無駄だと、世界中の偉い人達に思い知って貰う為に。そもそも自分は、味方の兵士に襲われたと文句を言えるような立場ではないのだ。昨日から今日まで、どれだけ味方の背中を斬り付けたのか、忘れた訳ではないのに。・・・いや、忘れていたのか。忘れて、"味方の兵士"なんて言葉を使ってしまったのだから。

遠くで銃声が響いた。ああ、まだこの戦場は終わってないのか。その音に気が逸れた瞬間、じゃりっ土を踏む音と共に、瓦礫の中か血と泥にまみれた男が剣を振り上げ飛び出してきた。男は立ち上がりざま、すくい上げるように刃を振るう。でも、遅い。自分は左手にぶら下げていた抜き身の剣で男の剣を弾く。そして飛び散った火花が消える間もなく、その反動を利用して、そのまま切っ先を男の首筋に食い込ませた。傾く首から鮮血が噴き出す。もうこれ以上返り血を浴びるのは御免だ。慌てて血を吹く男から遠ざかる。安堵する間もなく、すぐ真横から殺気が吹きつけ後ずさる足を止めた。鼓膜と頭の芯を揺さぶる銃声と共に、足元の岩が弾け飛んだ。相手の姿は闇に飲まれて見えない。が、銃の閃光は見えた。自分も腰に挿した拾い物の銃を抜いて、暗がりに向けて銃弾を撃ち込む。男の短いうめき声と、人が倒れる音がした。が、まだ死んでいない。ぞくり、と。死が自分の身体を潜り抜ける未来を見た。このままでは死ぬ。そんな時に感じる、第六感のようなものだ。この不思議な力、あるいは勘のお陰で自分は余程の事が無い限り命に関わる傷を負う事は無い。それでも、動かなければ死ぬ。僅かな焦りを覚えつつ、体を反らし後ろに倒れ込みながら残りの銃弾を全てばら撒いた。

暗闇の中で相手の頭が爆ぜたのと、相手の銃弾が自分の鼻先を撫せて行ったのは同時だった。それを見届けた自分は、そのままバランスを崩して倒れこみ・・・・・・・・・・  
べしゃあぁっ、と、先に斬った男の血溜まりへ背中から突っ込んだ。  
ゆっくりと服に生暖かい泥水が染み込む感触を味わいながら、濁った雨空を見上げる。  
「最悪・・・」  
乾き切った喉を震わせ、呟いた。

横になった途端、今度は眠気に襲われる。  
背中に伝わる生暖かい温もりさえ、冷え切った身体には心地よく感じられた。  
このまま眠ってしまいたい気分だか、そういう訳にもいかない。  
剣で身体を支えながら、嫌々と起き上がる。  
腰まで届く銀糸の髪が血で固まり、首筋に張り付く。  
髪に絡んだ血と雨水を絞ると、髪が指に絡みついた。  
苛立ちながら無理矢理引っ張ると、  
まだらな赤茶色に染まった髪はブチブチと千切れた。  
溜息が漏れる。  
もう嫌だ。  
早く帰りたい。

そこでふと、自分はおかしな事を考えているなと思った。  
今の自分は、敵に襲われる事より、服や髪が汚れる事の方がおおごとらしい。  
そう考えると、訳の分からない笑いがこみ上げてきた。  
くだらない事で価値観がズレている自分を滑稽に感じたのだ。  
こんな感性を持つようになっては、人として終わりだ。  
これまで化け物だの鬼だのと手酷く罵られてきたが、  
これでは否定も出来ない。

自分は力を持っている。  
誰にも負けないとは言わないが、  
誰にも殺されないだけの力を持っている。  
それは、この戦争を生き抜くには何よりも素晴らしい力。  
しかし守れる物は自分の命のみ。  
それ以外の物は、ボロボロと手のひらから零れ落ちてしまった。  
この力で得た物など何も無く、失う物ばかり  
目の前の者さえ守る事が出来ない  
役立たずな力。



### 絶望的な虚しさ

力など要らない。

自分が持つモノ全てがどうでもよい。

欲しいものは、ただ一つ。

あの日俺が無くしたもの。

しかしそれは、どれほど渴望した所でこの手に戻る事は無い。

この手の中にありながらも失ってしまったそれは

二度と戻る事は無いのだ。

ああ。

もし神様が居るのなら

せめて、あいつの心だけでも救ってやれないだろうか？

そして、もし許されるなら、

俺の手で

この腐った世界を――――

戦場の雨音は やけに耳に障った。

## 第01話 はじまりの朝

---

雨の音と、薄く窓から差し込む光で、エアニスは目を覚ました。

いつも以上に気だるい朝。何故こうも不愉快な目覚めなのか分からぬまま身を起こし、琥珀色の長い髪を掻き上げる。

夢を見ていたような気がした。でも、どのような夢かは思い出せなかった。どうせ、ろくでもない夢だろう。

昨夜から降り続けている雨が窓ガラスを叩いていた。それを見てエアニスは目をすがめる。

雨の日は嫌な事を思い出す。大戦中に見てきた幾つもの地獄の中で、たった一つの場面だけが彼の脳裏に焼き付いて離れない。

雨の降りしきる暗い森

目の前でじわりと広がる赤い染み

繋いでいた暖かな手が離れてゆく感触

頭を振り、浮かび上がる記憶を振り払った。

忘れない訳ではなく、忘れてはならない事だという事は分かっている。

自分でも受け入れ、完全に終わった出来事だ。しかし、それをたかが雨という共通点だけで思い出すという事は、自分でも意識していない、割り切れない思いがあるのかもしれない。

だとしても、だからそれはもう終わった事だ。今更どうにか出来るものでもない。

自室まで引いた水道で顔を洗う。雨水をろ過して使っている為、雨の日は水が随分と冷たいが、この気分を拭うのには丁度良かった。

腰まで届く琥珀色の髪を梳き、首の後ろで束ねた所で部屋の扉がノックされた。

「エアニス、起きていますか？」

聞こえてきたのは、まるで教師のように落ち着いた声色と言葉遣い。

扉から眼鏡をかけた黒髪の男が顔を覗かせた。

エアニスと同居しているトキだった。年の頃はエアニスと同じくらいで、少し背が高い。これといった特長の無い顔立ちに、これまた特徴の無い服装をしている。強いて言えば、誰に対しても丁寧な言葉遣と、その顔に常に張り付く愛想笑いが特徴か。

「朝ご飯、とっくに出来てますよ。早く食べちゃってくださいね」

笑顔でそれだけを言うと、トキはパタパタとキッチンへ戻ってゆく。

エアニスはイライラと足を揺すりながら頭を掻く。

何かが違う。普通このような場面で現れるのは男ではない筈だ。

エアニスに浮ついた願望がある訳ではないが、毎日エプロン姿の野郎に起こされるという境遇にエアニスは不条理さを感じていた。今のまま野郎と二人で新婚生活のような暮らしを続ける事に危機感を感じるのは何故だろう。何の危機かは、考えたく無い。

得体の知れない寒気に身体を震わせ、エアニスは自室を出た。秋も半ばの早朝である。単に肌寒いだけだ。

リビングの扉を開けると、そこにはテーブルに料理を並べるトキの姿。

今日も腹立たしいまでに似合う彼のエプロン姿がエアニスの神経を逆撫でる。



「今朝は随分と不機嫌なお目覚めですね？」

パンをちぎりながらトキは尋ねた。

「そう見えるか？」

エアニスのその日初めての言葉。

エアニスは平均に比べ、やや背が低い。長く伸ばした髪に白い肌と、女性のように華奢な容姿の割には、声は男らしく低めだった。

「ええ。ムカついている時か、考え事をしている時の顔ですね」

「・・・人の顔ジロジロ見てんじゃねえよ」

エアニスは感情を表に出すタイプではないが、どうにもトキの前では気を許しているせいか顔に出てしまう事が多い。それでなくても、彼は他人の感情など周りの変化に対して敏感な人間である。

エアニスの数少ない信頼できる仲間・・・なのだが、どうにも見透かされているようで面白くない。トキとの会話で、話題の矛先が自分であるところくな方向に進まない。エアニスは強引に話題を変える。

「大学はいつまでなんだ？」

「今日は早いですよ。授業は昼前に終わりますが、研究室に寄って帰りますので昼少し過ぎ位でしょうか」

トキは街で唯一の大学に通っている。

彼は生まれた時から戦争と共に過ごし、学業に就いた事が無いのだと言う。にも関わらず数日間の独学でこの街の最高学府の試験をクリアした。現在もかなりの成績を修めており、大学ではちょっとした有名人であった。しかし、エアニスはそれを大して不思議な事だとは思っていなかった。

トキの頭と身体は、特別製だという事を知っているから。





「エアニスは？ 今日も家でごろごろするだけですか？」

「別に・・・やる事も無いしな・・・」

スプーンをかじりながら相変わらずの調子で返事をする。

「もう1週間近く街に出てないじゃないですか。たまには運動しないと体なまりますよ」

説教臭く言うトキに、ものすごく嫌そうな顔をするエアニス。

「・・・最近寒いし、今日は雨降ってるから嫌だ」

「・・・とても去年まで世界中を旅して回っていた人間とは思えない言葉ですね・・・」

「はっ、1年もすりゃ、人間じゅーぶん変わるって」

天井を見上げ、おどけた調子で笑ってみせる。

そこで話は一瞬途切れ、スープを飲みながらトキが言う。

「あまり変わった様には見えませんがね」

エアニスの過去を知るトキの何気ない一言。その意味は十分エアニスも分かっていたが、気づかないフリをしておくことにした。

「そうか？ 自分ではけっこう社交的になったんじゃないかなーって思ってるけど。昔に比べれば人当たりも良くなったと思わないか？」

「街のチンピラに少しからかわれたくらいで、相手を動かなくなるまで殴るのが社交的ですか？」

街のごろつきに女みたいな奴だと絡まれ、怒りに任せ相手5人を張り倒したのは10日ほど前の事だったか。

「斬られなかっただけ感謝して貰いたいな」

「まあ・・・どうとは言いませんけど・・・」

真顔のエアニスに、トキは目を逸らして溜息を吐く。

エアニスの性格矯正は遠の昔に諦めている。

確かに、変わっていない、と言うには語弊があるのかもしれない。

新たな一面を得た、と言うべきか。トキがエアニスと出会ったのは一年半程前の事だが、彼はその頃に比べると良く笑うようになった。自分からふざけた事を口にし、トキを笑わせる事もある。

しかし、トキを感じる限り、エアニスの本質は変わっていない。

自分だけの正義を持ち、己のルールから決して外れない。

女と子供には心配になる程甘く、自分の中で定義する悪に対しては大物小物問わずに叩き潰す

。

しかし、一般的に悪とされる存在がエアニスにとって正義と映ってしまう事もあれば、自分の定義する正義の為に罪を犯す事を厭わない。

それが、エアニス＝ブルーゲイルの本質。

トキは呆れた顔で自分の食器を片付け、薄い割りに妙に重そうな鞆を肩に玄関へ向かう。

「さて、と、僕はもう大学へ行きますから。食べ終わったら食器を水に浸けといてくださいよ」

「はいはい・・・」

その気の無い返事に何を感じたか、トキは苦笑いを浮かべて窓を開けた。

「おや、雨、上がりそうですね」

「ほんとか？」

そんな些細な事にエアニスは過剰に反応し、トキと共に玄関から顔を出して空を見上げる。目覚めた時には薄暗かった空は今では薄日が射し込み、二人の影を濡れた芝に落としていた。

「ふーん、じきに晴れそうだな・・・」

朝からずっとむっつりしていたエアニスが嬉しそうな顔をする。雨上がりの晴天は空気が澄んでいて大好きなのだ。こんな日なら、気分転換に街へ出てみようという気にもなれる。

にこにこしながらトキが言う。

「あまりはしゃいで怪我しないでくださいよ」

「子供か？俺は？」

「今の表情は子供そのものでしたよ。」

「・・・その辺りは変わったと言えるのかもしれませんがね」

その言葉に、エアニスは今まで以上に不機嫌な顔でトキを睨みつける。

「おっと、いい加減出発しないと遅刻ですね。」

「それでは・・・」

言いたい事だけ言って街へ向かうトキ。まるで当て逃げである。

トキが大学へ行った後、エアニスは食事を済ませて食器を洗い、歯を磨いてから再び窓の外を見る。もう雨は殆ど降っておらず、街の方角の空は青空を覗かせていた。

「・・・ふん」

満足そうに頷き、窓に腰掛けて煙草を取り出し火を点ける。眼下に広がるミルフィストの街と、雲の隙間の青空を眺めながら、暫しまどろみの時間を楽しむ。

この家は街から半時ほど歩いた山の中腹に建っている。1年前、この街に流れ着いたエアニスとトキが、放置され朽ち果てた炭焼き小屋を改装、増築したもので、立地条件的にも人間嫌いなエアニスにとって丁度よい場所だった。最初は街に出る為に少し位歩く事は大した労力では無いと思っていたのだが、元々面倒臭がり屋のエアニスは日が経つにつれ街に出向く頻度が少なくなっていた。だが、こういう日なら街に用が無くても、散歩がてらぶらぶらするのも気持ちがいいだろう。

勢いよく紫煙を吐き出し、立ち上がるエアニス。

「さて、と。行くかっ」

ベコベコの灰皿に煙草を押し付け、自室で身支度をする。

外出する時、普段は着慣れた厚手のローブを羽織っていくのだが、あの服は雨に濡れやすかったので今日は裾の短い身軽な服を着た。しかし軽装でも腰に剣を下げていたり、シャツの下に細かな鎖を編み込んだ防刃服を着たりと、戦争中の習慣が未だに抜けないのは悪癖と呼ぶべきか。しかし、戦争が終わったとはいえ、これらを手放すのはまだ早過ぎるとエアニスは感じていた。

支度を終え玄関を出た頃には雨は上がり、澄んだ空気を通し日が射していた。

妙に嬉しくなり、エアニスは小走りで街に向かった。

エアニスはこう考えていた。

この世界は全て、偶然の積み重ねだと。

この世に必然なんてものは無い。それは全て偶然の積み重ねから成り立っているのだから。必然を紐解いてゆけば、それはとりとめも無い偶然の集まりである事に気づくだろう。

自分達は、そんな些細な偶然の積み重ねによって、この世界に翻弄され続けているのだ。だから、そんな些細な偶然が、自分の未来に大きな影響を与える事も珍しくない。

この日、エアニスが目を覚ました時間や、空に晴れ間が覗いたタイミング、彼の気分や歩くペース、日に照らされキラキラと輝く濡れた草原に目を奪われ、暫く足を止めていた事など。

彼の何気ない行動のどれか一つが欠けていたら、今日の出会いは始まる物語は無かったのかもしれない。

後になってエアニスは思う。

この日はまさに、エアニスにとって奇跡のような日だったのだ。

無論、今現在の彼はそんな事に気付く筈もないのだが。



時刻は十時を少し回った頃。

街に下りてきたエアニスは特にする事もなく大通りをぶらぶら歩いていた。

ミルフィスト。

大陸の北に位置し、二日ほど歩いた場所には港街がある。街の中では大きな街道が幾つも交差しており、そこから港へ向かう街道が分岐しているため、旅人や商人といった流れの人間がとても多い。その割に治安は良い方で、大通りの露店は大勢の人々で賑わっていた。

比較的物が手に入りやすい事と、それなりに機械文明の浸透した暮らしやすい街で、何より街並みが綺麗だった。街の石畳や家々の壁は殆どが白く塗られていて、ちょっとした観光地でもある。

山の中腹にある自分の家からは、この美しい白い街並みと、港町の方角に見える青い海が一緒に見える。エアニスがこの街に住んでいるのは、ある恩人から紹介して貰ったという理由なのだが、それ以上に、その景色が気に入っているという事がエアニスをこの街に留めている一番の理由なのかもしれない。

露店でコーヒーを買い、飲みながら歩くエアニス。

ふと、大通りから外れた路地にある無骨な建物が目に付く。エアニスがミルフィストに来てから暫く通っていたギルドだ。

ギルドというのは、旅人に仕事を斡旋する紹介所のような所で、土木作業から人の護衛まで、様々な仕事がある。戦争が終わって間もない今、新たな定住地を求める旅人が増えているので、

どの街にも必ず一件は国が運営するギルドがあった。

(久々に顔出しておくか)

思ったがままにギルドへ向かう。コーヒーのストローを咥えながら立て付けの悪いドアを開けた。

扉をくぐった途端、一斉に向けられる険しい視線。いかにも、といった柄の悪い大男達がエアニスを見つめていた。何処の街のギルドも、似たようなものだった。

そんな視線など気づいていないかのように、真っ直ぐとカウンターに座る体躯の良い初老の男の元へ向かう。男がエアニスに気づいた。

「おお、エアニス、久しぶりだな」

笑って右手を上げるエアニス。

初老の男はバルガスといった。このギルドの管理人で、エアニスも以前、金とコネクションを得る為に仕事を紹介してもらっていた。強面で近づき辛い男だが、接してみると気さくな性格。戦時中はどこかの軍隊の将軍か何かをしていたらしい。何故その地位を捨てて、このような俗な仕事をしているのかとは尋ねていない。この世界では戦争中の話に触れるのはタブーといった風潮がある。大多数の人間にとって、戦争中の事は触れられたくない過去なのだ。

「何の用だ？ 仕事でも探してんのか？」

「いや、これといった用は無いよ。近くを通ったから、ちょっと寄っただけ」

そう言いながら壁に貼られた賞金首の手配書を眺める。

「小一時間程度で終わるような仕事なら引き受けてもいいぜ」

「じゃあ店の裏のドブさらいを頼む。昨日腰をやっちゃってなあ。このままじゃ町内会の連中にサボってると思われちゃう。

こんな事を頼めるのはお前くらいだ。駄賃には色をつけるぜ」

「そう言って貰えるのは嬉しいが・・・すまん。他を当たってくれ・・・」

「つれねえなあ・・・」

バルガスの何処まで本気か分からない話を聞き流しながら、ずずず、とコーヒーを飲み干す。そろそろ本題に入ろう。

「最近、裏情報から離れてるからさ。何か変わった話でも聞ければと思って来たんだが」

旅をしている時なら自然とそういった情報を知る機会があったが、最近では街のニュースすら耳にしない浮世離れした生活を送っているのだ。街のニュースはともかく、裏事情というものは知っておかないと昔から落ち着かないのだ。

「べつに。相変わらず至って平和だぜ、この街は」

「ふーん、そっか・・・」

何故かつまらなさそうなエアニス。

「ただ、な」

トーンを落としたバルガスの言葉に、一度外した視線を彼へと戻す。

「噂の域を出ないんだが、最近、エイザムの連中が街に入り込んでるらしいぜ」

「エイザム……。確か……。サカナ料理の名前だったな」

「違うよ……。犯罪組織の名前だ」

聞いたことの無い名前だった。名前の知られていないローカル組織か、エアニスが裏の情報に疎くなったここ1年半の間に出来た組織か。

「でかいのか？」

「いや、ランバテイルの辺りでのさばってるチンピラ連中さ。バックでも付いたのか、最近調子付いて活動範囲を広めているらしい」

「ランバテイル？ 随分田舎ら来てるんだな」

ランバテイルはここから車を使っても5日ほどかかる場所にある。小さな組織の活動範囲としては、ミルフィストは地理的に突出している。こんな離れた街では、抗争が起こったら応援など待ってられないだろう。この街にだって昔から犯罪組織は幾つも入り込んでいるのだ。

「仕事で出張して来てるんだ。何の仕事かまでは知らねえがな。」

悪い事は言わねえから、ああいゆう連中といざこざ起こす事だけはやめておくんだぞ」

バルガスの忠告にエアニスは肩をすくめて答える。

「そうだな、もう懲り懲りだ」

犯罪組織に狙われると昼夜を問わず襲われるようになり、おちおち眠ってもいられなくなるのだ。エアニスは過去にそういった経験があるのだが、その時は身の安全よりも睡眠時間の方が深刻だった。

昔は少しくらい眠らなくても平気だったが、今は一日8時間は眠らないとだるくて仕方無い。そんな体の時につまらない連中に目を付けられては事である。

その後、バルガスと他愛無い世間話をしてからギルドを立ち去った。

本屋と刀剣屋に立ち寄り、買った本を馴染みの喫茶店で読みながら時間を潰す。時計を見ると昼を過ぎた所だった。

「もう少しでトキの大学が終わる時間だな……」

たまには迎えにでも行ってやるか、と思い、街の端に位置する大学へと向かう事にした。

エアニスは近道をしようとして人通りの少ない裏路地に入る。

「……ん？」

声が聞こえた。

随分遠くからだが、多人数が走る足音と怒声、そして剣戟の音。耳の良いエアニスでないと気付けない、かすかなものだった。

早速バルガスと話していたエイザムという組織が頭をかすめ、足が止まる。何も好き好んで田舎猿どもにもに関わる事は無い。さっさとこの場から立ち去ろうとしたのだが。

聞こえてくる声に、女の声が混じっている事に気づいてしまった。

それも、追われる側の声。

踵を返した足が再び止まる。

「……ち……。まあ、いいか」

一瞬だけ悩んだのち、エアニスは駆け出していた。



「待ちやがれ！」

男の一人が粗暴な声を張り上げる。

ごろつきの集団に追われているのは2人の少女だった。

一人は明るい赤毛の剣士風の少女、大柄な剣を片手にもう一人の少女の手を取り、走る。手を引かれて走っているのは、金髪のロングヘアを結んだ、魔導師風の少女。二人ともまだあどけなさが残る顔立ちだ。赤毛の少女の方が僅かに年上といったところか。

追っているのは何処にでも転がっているような、ごろつき風の4人の男達。ただのごろつきと少し違うのは、全員が手に剣やナイフを持っていたという事だ。路地裏とはいえ白昼堂々そのようなものをぶら下げているのだ。通報されればその井手達だけで役人や憲兵隊に撃たれかねない暴挙である。彼らもそれなりの覚悟を持って事に当たっているのか、それとも単に頭が悪いのか。

「レイチェル！、先に逃げて！！」

逃げ切れないと悟ったか、剣士風の少女は立ち止まり、大剣を構える。

「でも・・・っチャイムは！？」

「スグに追いつくからっ！！」

一瞬だけ迷い、走り出すレイチェルと呼ばれた魔導師風の少女。

チャイムという名の赤毛の少女が後ろに視線を戻すと、追ってきた先頭の男が剣でチャイムに切りかかろうとしているところだった。完全に、相手を殺そうとしている太刀筋だ。

慌てて剣で斬撃を弾き、男の横腹に思いっきり蹴りを入れる。よろけた男を後続の追っ手に向けて突き飛ばし、再び走り出そうとすると・・・。

「きゃあっ！！」

前から聞こえたレイチェルの悲鳴。先回りでもしていたのか、彼女は追っ手のごろつき達と同じタイプの男に捕まっていた。

「レイチェル！！」

チャイムの意識がそちらに向いた瞬間、

ガイイン！！

追っ手の剣がチャイムの剣を弾き飛ばし、同時にチャイムの肩口を浅く捉えていった。

「つっ・・・！」

傷は深くはないが、思わずあとずさるチャイム。飛ばされた剣は、追っ手達の足元に転がる。気づくと、二人は完全に囲まれていた。

場所は背の高い煉瓦造りの家が立ち並ぶ裏路地。逃げ道は塞がれ、人目も全く無い。相手はごろつき風の男が前方に2人、後ろに4人。前方の男にレイチェルが捕らえられ、まさに打つ手なしという状況にチャイムは息を呑む。

「散々逃げ回ってくれたなあ・・・」

リーダー格だろうか。レイチェルを捕らえているごろつきと一緒にいた男がドスを効かせた声を出す。腰の大振りのナイフを抜いて、チャイムに歩み寄る。

「やめて！用があるのは私だけでしょ！！チャイムは関係ないっ！！」

叫ぶレイチェルにニヤついた視線を向けるリーダーの男。

その瞬間

どがっ！

レイチェルを捕らえていた男が盛大に吹っ飛ぶ。

突然、狭い路地から長髪の男が飛び出してきて、そのままごろつきに飛び蹴りを叩き込んだのだ。まともに横っ面に入り、レイチェルを捕らえていた男は伸びてしまう。

突然現れた長髪の男。もちろん、騒ぎに首を突っ込みに来たエアニスだった。

唐突な出来事に、その場にいた全員の動きが止まる。エアニスは何も喋らず、その場に立ち尽くして自分が蹴り倒した男と、二人の少女、その他のごろつき達の順に視線を巡らせる。彼なりに状況を推測しようとしているのだが、のんびりとしたその間が悪かった。一向に相手にされないリーダー格の男が、しびれを切らしたように叫ぶ。

「なっ、なんだてめえはっ！？」

第三者の登場に焦ったのか、問答無用でナイフを構え向かってくる。

エアニスには状況が全く分からなかったが、とりあえずこの男は自分にとっては敵らしい。体ごとぶつかって来ずに、腕だけで切っ先を向けてくるリーダー格の男。エアニスは姿勢を低くしながらナイフを持った腕を軽く受け流し、男の懐に潜り込む。そのままジャンプをするように、斜め下の位置から男の顎に手の平を打ち付けた。

グシャッ！！

男の顎を砕き、そのまま後ろの壁に後頭部を叩きつけた。

バラバラと男の歯が石畳に落ちる。エアニスは男の顎を掴んだまま、壁に押し付け離さない。





「まだやるか？」

視線は自分が壁に押し付けている男に向いていたが、そのメッセージは残りの男達に言ったものだろう。エアニスが顎を砕いた男は、既に意識を失っている。

まともに色めき立つ男達。チャムもレイチェルも、その場から逃げる事を忘れ男達と同じようにエアニスを見ていた。

「こ、ここまで来て引けるかよ！！」

怯んだ表情を見せながらも、残りの4人が同時に剣を構え向かってくる。

呆れた表情でリーダーの男を放り投げ、エアニスは腰の剣をベルトから外した。刀身を鞘に収めたまま剣を構える。こんな相手の為に剣を汚すのは気分が悪かったからだ。

男の二人がエアニスを挟み込むような斬撃を放つ。剣で受けると鞘に傷が付くため、エアニスはジャンプして刃をかわす。軽々と大人を飛び越せるほどの跳躍力だった。呆けたようにエアニスを見上げる二人の男。エアニスは空中で体をひねり、一人の男の肩に鞘の一撃を、もう一人の男には、着地する為の足を男の首に引っ掛け、頭から地面に叩きつけた。男の首から足を抜く前に三人目が向かってきたが、エアニスはしゃがみ込んだままで、男のスネを真横に薙ぎ払う。男は綺麗に体が半回転して頭から地面に倒れこんだ。

この間僅か数秒。あまりにもあっさりと男達をいなしてしまったエアニスを、呆然と眺める二人の少女。そんな不覚となっていた彼女達の意識が覚醒する。最後の一人を見ると、その手には黒光りする鉄塊が握られていた。

拳銃。

「！？」

彼女達より少し遅れて男の銃に気づくエアニス。油断していた事も加えて、対応が僅かに遅れた。男の視線と銃口はエアニスの胸の中心に向けられている。こんな雑魚相手に体を張った博

打を打つつもりはない。立ち尽くしている少女二人をかっさらい、エアニス は建物の影に飛び込んだ。

乾いた数発の発砲音。盾にした煉瓦の壁が小さな破片を撒き散らす。

銃声が止んで、暫くして路地を覗き込むと、最後の一人の男が背中を向けて走り去っていく所だった。追いかけてみようとも思ったが、そこまで執着する事でもない。あっさり諦め、座り込んで小さく息を吐いた。

「大丈夫か？ 怪我は？」

煙草を出しながら襲われていた少女二人に、のほほん、とした調子で話しかける。

よく見ると、赤毛の少女の肩からは血が流れていた。

「大丈夫、たいしたこと、ないわ」

「お宅はたいした事なさそうだけど、連れが気を失ってるみたいだぞ？」

「え」

チャイムが隣に座っているレイチェルを見ると、チャイムにもたれるようにうなだれていた。怪我はしていないはずなので、安心して気が抜けたのだろうか？

「ちょっとレイチェル！ 大丈夫！？ ねえ！！」

やれやれ、といった雰囲気エアニスは伸びた男達を見る。

どうやらこの少女達、ワケありのようだ。逃げていった男が拳銃を持っていたのがその理由である。

この国に限らず、何処の国でも拳銃は軍隊しか持つことしか許されず、一般人が持つ事はできない。裏の取引を介さない限りは。

こんなトラブルなど、エアニスにとっては取るに足りない下らない出来事だった。せいぜい、一ヶ月もすれば忘れてしまうだろう。

しかし結局、エアニスはこの日を生涯忘れる事はなかった。

それは些細な偶然が呼び起こした、奇跡の日だったのだから。

「これで・・・大丈夫でしょう」

「・・・ありがと」

チャイムの肩に巻いた包帯を留めて笑顔を浮かべるトキに、チャイムはあまり感謝していないような口ぶりで礼を言う。

場所は騒ぎを起こした路地裏からそれほど離れていない、人目の多い大通りに面した宿屋。部屋に居るのはエアニスとチャイムと、ベッドで横になっているレイチェル。そして学校帰りにエアニスに捕まったトキだった。出来ればもっとあの騒ぎの現場から離れたかったが、レイチェルが気を失ったままだったので、とりあえず人目の多い手近な宿へエアニスが二人を連れ込んだのだ。

少女らの事情は分からなかったが、あの場でさよならできるほどエアニスは冷たくはなかった。彼の名誉の為に言っておくと、エアニスには決して下心などは無い。ただ単に、彼は女子供に対して甘いのだ。

「なかなか手馴れたものね。あなた、こういう仕事の経験あるの？」

チャイムは的確な手当てを施された肩をさすりながら、トキに聞いた。

最初は自分で手当てするつもりだったが、トキに僕が手当てをしますと、やんわりと押し切られてしまい嫌々ながらも任せていたが、彼の処置の正しさと手際の良さに途中から感心していたのだ。

「いやあ、それほどでも。昔はこのくらいの怪我はよくしたものですからね、自然と慣れてきちゃったんですよ」

さらりと意味深な言葉が出てくる。

「・・・あなた、元軍人か何か？」

「うーん、まあ、そんな所ですかね」

トキは笑いながら背を向けると、話の途中にも関わらず、治療に使った道具を持って洗い場の方へと行ってしまった。

「・・・変な奴」

ぽつりと呟き、チャイムが部屋に視線を巡らすと、窓際でボーっとしているエアニスと目が合った。

「あいつにアレコレ尋ねたところで疲れるだけだぞ」

「・・・そーみたいね」

チャイムはトキの事を、不思議な雰囲気のある男だなどと思った。何処にでも居る普通の青年に見えるが、その姿は何処か作り物めいていた。もちろん外見の話ではなく、内面の事だ。ちゃんと会話が成立しているのにも関わらず、彼の全てが虚ろに感じられた。空気のような、掴み所の無い態度とでも言うのだろうか。チャイムにとってのトキの第一印象はそれだった。

「じゃあ、あなたに聞くわ」

「は？」

エアニスはチャイムに丸い瞳と指先を向けられ、間の抜けた声を出す。

意思の強そうな赤みを帯びた茶色い瞳が印象的だった。エアニスより少し年下、一緒に居た金髪の少女より上、といった年頃だろう。明るい色の艶やかな赤毛は肩にかかる長さで雑に切り揃えられており、それが少し勿体無く感じられた。顔立ちは小さく、首や肩の肉付きも薄く頼りなさを感じる。路地裏で男に追われていた時に剣を振るっていたが、とても剣士のそれとは思えなかった。

何故そんな所まで見ているのかというと、彼女はトキに手当をして貰ったままで、上半身は下着と薄いシャツを身に着けているだけなのだ。エアニスは居心地が悪くなり彼女から目を逸らす。因みにベッドで未だに気を失ったままの金髪少女の方が、胸が大きいような気がした。

「あなた、ずいぶん強いじゃない」

「まあな」

自分で言うのもどうなんだろう、と突っ込みたくなったチャイムだが、事実その通りである事と、それをどうでも良い事として捉えているような気の無い返事に、茶々を入れる気は失せてしまった。

「子供の時からずっと旅してたからな。その辺のごろつきなんか、相手にならねーよ」

「へえ、」

「剣なら誰にも負けない自信はあるぜ。今は引退・・・いや、休暇中？ってことで、この街に住んでるんだけどな。さっきのメガネも同じような境遇で・・・」

突然、ニコリと笑みを深くするチャイム。

「・・・何がおかしい？」

「ごめん、見かけの割には良く話すのね」

「・・・放っとけ・・・」

小声で呟いて、また窓の外を向いてしまったエアニス。気分を害してしまったらしい。チャイムは彼の、調子よく自分の事を話す姿と、ごろつきを一瞬でたたんでしまった姿とのギャップがおかしかったのだ。

戦い慣れた人間と接するのは少し怖いものだが、エアニスには彼女が勝手に抱くそんな威圧感など微塵も無かった。むしろ話しやすくて、彼の中性的な容姿は安心感を抱かせた。

「ごめんー、だって、そういう雰囲気の人に見えなかったんだもん」

その一面に安心してか、すでにエアニスに対しての口調は馴れ馴れしくなっていた。エアニスは振り向こうとしない。

「う・・・うん・・・」

ベットの上で気を失っていた少女が身を動かす。

「お。やっとお目覚めか？」

「レイチェル！」

小走りでベットに駆け寄るチャイム。エアニスも少女の顔を覗き込んだ。

16、7歳くらいだろうか、色白で華奢な四肢。とても旅人には見えない、深窓のお嬢様のようだ。と例えてもいい。首の後ろで一本に三つ編みされた長い金髪と、深い紫色の瞳が印象的な少女だった。

エアニスは彼女の瞳の色に僅かな既視感を感じた。しかし、それが何によるものなのかは分からなかった。

まだ寝ぼけているのか、緊張感の無いぼんやりとした表情で辺りを見回す。

「チャイム・・・ここ、どこ？」

困った顔でチャイムはエアニスを指差し、

「ほら、路地裏であいつらに襲われて、この人に助けてもらったのよ」

「人を指さすな」

彼女の癖だろうか。二度も指を指されているので、一応エアニスは突っ込んだ。

そこでエアニスは初めて少女にじっと見つめられている事に気づく。

「・・・どうも」

何を言えばいいのか分からず、間拔けたリアクションを返した。

すると少女は突然飛び起きてチャイムの肩を掴む。

「"石"は!？」

「だ、大丈夫だって! あんたの首にかかっているでしょ!!」

ハッ、と自分の胸元を見る。そこには黒い石が収まった少し大きめのブローチ。そのブローチに嵌めこまれた石を両手で包み込み、少女は安堵の表情を浮かべる。

「あなたが助けてくれたのですね。本当に有難うございました」

「あ、ああ、別に気にすんな」

さっきまでの顔とはうって違って、キリリとした表情を見せるレイチェル。それだけで急に少女が大人びて見えた。

「おや、丁度いいですね。金髪のお嬢さんもお目ざめになりましたか？」

ひょこりとトキが顔を覗かせた。

「下のカフェでケーキを買ったので、お茶を淹れたのですが」

二人の少女の目が点になる。

「おお、気が利くな。何がある？」

「ショートケーキと、チーズケーキ。モンブランにミルフィーユです。」

「紅茶はダージリンでいいですか？」

「紅茶は何でもいいや。それより俺、チーズケーキいただきな」

「駄目です。チーズは僕のです」

「・・・何だこの野郎」

とぼけた二人のやりとりを見ていて思わず笑ってしまう二人だった。

「まさか、こんな流れでナンパされるとは思わなかったわー」

チーズケーキを口に運びながらチャイムは呟いた。結局チーズケーキは彼女の元へと行った。チャイムもそれが好きだと言い、トキが譲ったのだ。彼女は遠慮の欠片もなくそれを受け取った。

「いやあ、こんな可愛らしいお嬢さん方とお茶ができるなんて光栄ですよ」

「やだもー！ 上手いんだからー！」

「ノってんじゃねーよ。それに、これがナンパに見えるか？」

「あ、あはははは・・・」

路地裏での緊張感は何処へやら。レイチェルは乾いた笑いを上げる。

4人は午後のティータイムを楽しんでいた。ほんの少し前まで命の危険に遭っていたというのにだ。

「そいえば、自己紹介すらしていませんでしたね。

僕はトキと言います。ここで、大学生をやっている者です。えっと、今年で19歳になります」

トキが二人の少女に視線を送る。

「あ、えっと、チャイムよ。見ての通り、旅の剣士ってとこかな・・・、えーと・・・、あたしも19よ」

「レイチェルと言います。

一応、魔導を使えます。私も旅人で、17歳になったばかり」

そうして順に自己紹介を進めてゆく。残ったエアニスが何も言い出さないの、三人の視線がエアニスに集まる。

「・・・エアニスだ」

エアニスは一言だけ呟くとそっぽを向いてしまう。

「それだけ・・・？」

チャイムが控えめに突っ込む。

「ほら、何かあるじゃん？ 何してるとか、出身とか歳とか！」

「別に話せるような経歴なんて無いよ」

「・・・あ、もしかして、あたしが良く喋るのねって言った事、気にしてる？」

凶星を突かれ口元が強張るエアニス。そこに、トキがフォローを入れる。

「エアニスはですね。アレです、ただの無職の風来坊です」

「フォローになってねえ！！」

「そいえばレイチェル。体の方は怪我ないの？」

エアニスを弄るのに早くも飽きてしまったのか、チャイムは話題を本筋へと戻す。

チャイムの言葉に、思わず自分の体を見回すレイチェル。

「気を失ってたからさ、どこか怪我したのかなーって思ったんだけど」

「別に・・・どこも怪我してないけど・・・」

眉をひそめ、レイチェルは思い出すような仕草で考え込む。

「ま、拳銃突き付けられたら、普通は誰だって怖気づくだろ。アイツ等追い返して、安心して気が抜けたんじゃないのか？」

ここで自己紹介の話をぶりかえすのも何なので、思ったままの感想を口にするエアニス。

あの時の事を思い出したのか、レイチェルにハッとした表情が浮かんだ。

恐怖に凍った、表情。

「・・・ああいった経験は初めてか？」

どことなくエアニスの声は優しい。

「いいえ、初めてと言う訳じゃないけど、あそこまで追い詰められたのは久し振りだったので・・・」

今まで明かった二人の少女の顔が陰る。

「今までもこんな事があったのですね？」

「まあね・・・」

「ワケありか？」

チャイムとレイチェルは困ったように顔を見合わせる。

「何か協力できる事があれば、力になりますよ？」

「おいおい・・・」

トキが初めて真面目な顔をして話に入ってきた。トキが本気で言っている事を感じ、エアニスは慌てる。

だがしかし、チャイムとレイチェルは彼の言葉に戸惑うように口をつぐんだ。レイチェルが顔を上げる。

「すみません・・・事情が簡単じゃないんです。

誰にでも事情を話せるなら、もう誰かに助けを求めています・・・。

・・・ごめんなさい」

気まずそうに彼女は謝り、部屋に沈黙が落ちる。

トキもその答えは予想していなかったようだ。

「まあ、そうだよな」

露骨にエアニスの口調が白けていた。

「命まで落としかねない事情に他人を巻き込むなんてとんだ迷惑な話だ。

俺だって自分だけで何とかしようと思うね」

その言葉に、トキが神経質そうに肩を揺らした。

「エアニス。それで昔、痛い目を見た事を忘れたんですか？」

眼鏡を押し上げ、非難するような声で言った。眼鏡に当てた手が影になり、その表情は三人には見えない。

益々気分を害したエアニスは、すっと目を細めた。

陰悪な空気が流れ始める。だがエアニスはトキに反論できなかった。痛いところを突かれたという自覚があるため、一度トキを睨みつけただけで何も言わず視線を逸らしてしまった。

「エアニスさんの言うとおりで。これは、私の問題ですから・・・。

私がやらなくちゃいけない事だから・・・」

沈黙を破ったのはレイチェルの思いつめたような声。

その表情に、不安を覚えるエアニス。こんな顔をして全てを背負い込み、大変な思いをしていた少女を、エアニスは知っている。それは、とても見ていられるものではなかった。だから、エアニスの口から余計な言葉が漏れる。

「まあ・・・自分の手に負いきれないものを背負い込むのは・・・

それ以上の馬鹿かもしれないけどな」

思わず口を突いてしまった言葉。自分の心無い言葉のフォロー、という訳ではない。自分にとっての教訓、戒めだった。

「まあ、どうでもいいけどさ。

それより、その事情ってのはアンタの・・・レイチェルの事情なのか？

"私がやらなくちゃ"って言ったろ？」

気を取り直し、そんな事を尋ねるエアニス。突き放すような事を言ったが、彼なりに彼女達の事を心配しているのだ。

「そうです。チャイムは・・・私の事情に巻き込んでしまっただけなんです」

申し訳なさそうに言うレイチェルに、慌ててチャイムが口を挟んだ。

「何言ってるのよ、首を突っ込んだのは私の方なんだから、レイチェルが気にする事ないわよ。それに、私はちゃんとあんたに雇われて護衛してるんだから」

「でも、雇ってるって言っても・・・」

レイチェルは笑っているような、困っているような顔で言う。

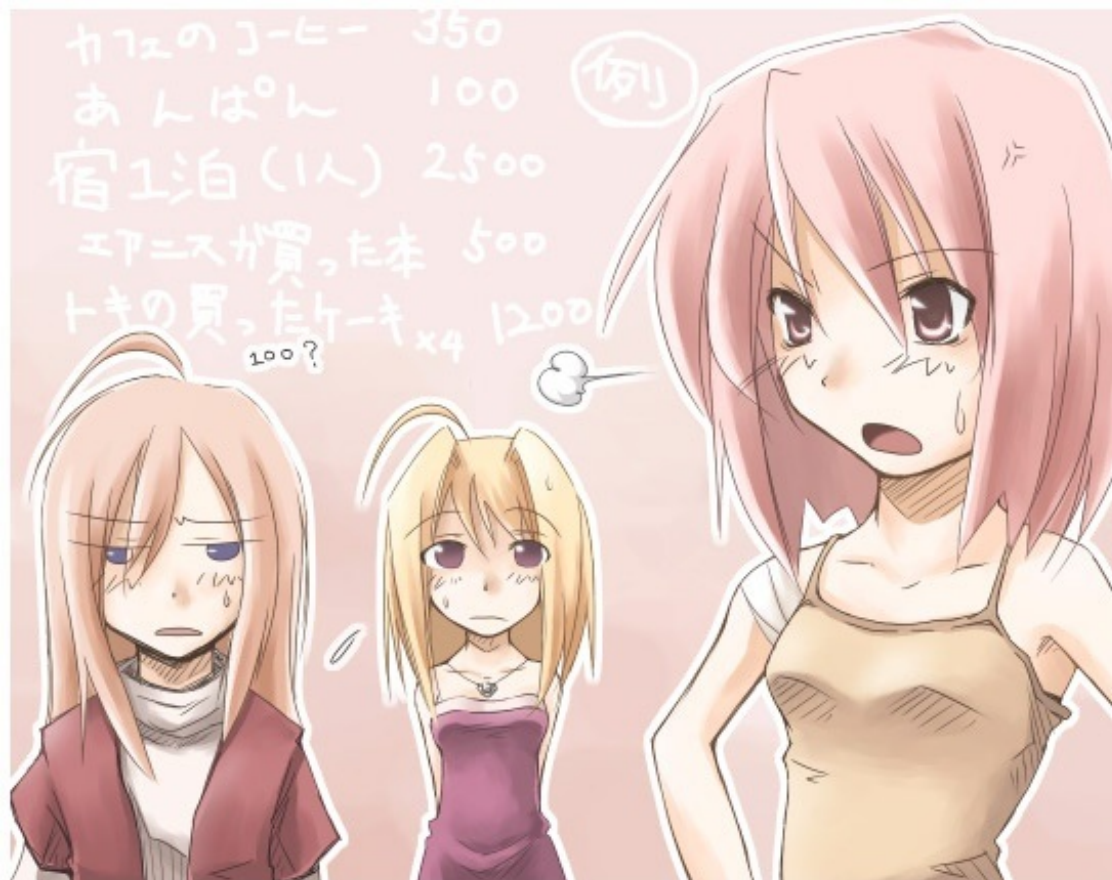
「護衛なのか、お前が・・・。1日いくらで雇われてんだ？」

「一日、100で」

何故か誇らしげに答えるチャイムに、思わず椅子からずり落ちるエアニス。トキも口が開きっぱなしである。傭兵一人を雇う相場は大体一日15,000からである。100という額は、子供の一日あたりの小遣い程度である。

雇われているというのは、どうやら建前のようなようだった。





「大体、でかすぎるんじゃないか、この剣。あんたの力や体重じゃ、こんな重い剣振り回せないだろ？」

エアニスは壁に立てかけられたチャイムの剣を手取る。

「あっ、こらっ！！勝手に・・・」

鞘から刀身を抜いて窓から射す光にかざしてみる。手のひらを広げたくらいの両刃の剣。分厚い刀身には縦溝が入り肉抜きがされているが、それでも重さは見た目通りでかなりの豪腕でないと使いこなせそうにない。

「なんだ、この剣・・・？」

思わず眉をひそめるエアニス。路地裏で彼女の剣を見た時は気づかなかったが、彼女の剣は刃が潰され紙すら斬ることができない代物だった。

「これだったら、相手を殺すことなく戦えるでしょ？」

チャイムのそんな言葉に、エアニスは今度こそ呆気にとられる。

「馬鹿か、お前。命のやり取りをしてるんだぞ。そういう余裕は、もっと強くなってから見せろ。死ぬぞ」

「・・・う」

エアニスはチャイムの目を真っ直ぐに見て言う。その声には茶化しもからかきも無く、彼女はたじろぐように目を逸らす。

「たしかに、悪い姿勢ではありませんが、相手の身を案じて戦うのは、とても難しい事です。まずは先に自分の身を案じるべきですね」

やんわりとトキに追い討ちをかけられ、チャイムは机を叩き反論する。

「い、いいでしょ！！あたしにとっては譲れない一線なのよ！！

「だいたい、あんた達には関係ないじゃない！」

「そうだな。俺達には関係の無い話だ」

無関心そうにそう答え、エアニスは彼女の剣を鞘に納める。その時、柄に付いた小さな飾りに気づいた。十字架と天使の羽をあしらった紋章、縁取りに蛇が絡みついた精緻なエンブレム。それはエアニスの良く知るものだった。

「・・・お前、エベネゼルの出身か？」

「そ、そうだけど・・・」

小さく溜息をつくエアニス。エベネゼルはこの世界で最も大きな宗教国家である。どの国にも加担する事なく、常に中立を保つ国。魔導、科学を問わず医療の進んだ国で、先の戦争でも世界中の戦場へ医者や魔法医を大勢派遣していた。

この世界で最も大きな国は大戦を引き起こしたベクタ帝国だった。しかし終戦と共にベクタは解体され、今ではエベネゼルが世界で最も大きな国だ。しかし中立を貫くエベネゼルには大国としてのリーダーシップというものがなく、現在この世界には中心となる国が無い。世界中の国から頼りにされており、多くの民に世界の中心となる事を望まれる、非常にクリーンなイメージを持った国家である。

しかし、エアニスにとってエベネゼルは最も忌み嫌う国の名であった。

「なるほど、偽善の国の使者か・・・」

「え？」

エアニスの嘲笑交じりの呟きは誰にも聞こえなかったようだ。

「なんでもない。ホラ、返す」

「うおーっとおおー！！」

エアニスが放り投げた鉄塊をチャームは何とか受け止める。やはり、剣の重さに腕力が追いついていない。

エアニスは、何故彼女がエベネゼルの紋章が入った剣を持っているかという疑問を問おうとしなかった。エベネゼルのでの出来事を思い出すのが嫌だったのだ。また結局のところ、彼女達の身の上など、どうでもよかったのかもしれない。

「さて、と。そろそろ帰ろうか、トキ」

ケーキの欠片を口に放り込み、おもむろに立ち上がるエアニス。急に不安そうな表情に変わるチャーム。その時、彼女はエアニス達と居た間は自分が安心しきっていた事に遅まきながら気づいた。そしてその安心感は、ずっと周りを警戒しながら旅を続けていたチャームにとって久しぶりの事だった。

「ですが、エアニス・・・」

トキは困った声を上げるが、毅然としたレイチェルの顔を見ると無理に手助けを買って出るという訳にもいかなかった。彼女達にも思う所があるのだろう。その思いは尊重せねばならない。「宿代くらいは持ってやるよ。ここに連れ込んだのは俺だしな。ま、悪い事は言わないから、役人に保護してもらった方がいいぞ」

席を立ち、扉へ向かうエアニス。チャイムはエアニスに言葉をかける事が出来なかった。内心では彼を引き止めて助けを求めたい気持ちはあったが、あくまでこれはレイチェルの問題であり自分がどうこう言える事ではない。

「・・・ねえ！」

チャイムが突然立ち上がり、エアニス呼び止める。彼は首だけで彼女の方へ振り向く。

「その・・・あ、ありがとうって言ってなかったから・・・」

どもった口調で礼を告げる。本当は、他に言いたい言葉があるのに。

「別に」

その一言だけを残してエアニスは部屋を出て行ってしまった。溜息をつくトキ。

「僕達は街の裏山にある家に住んでいます、もし、何かあったら訪ねて来て下さい。きっとエアニスも協力してくれる筈ですから・・・」

トキは、勝手にエアニスの家を教えてしまった。出すぎた真似だったかもしれないが、この事をエアニスは怒らないと思ったのだ。

そして一礼を残し、トキも部屋を出て行ってしまった。

部屋に残されたチャイムとレイチェルは、暫く言葉が出なかった。

「・・・ね、レイチェル・・・。無理してない？」

優しく話しかけるチャイム。そんな事は聞くまでもない事だったかもしれない。

「まあ、ね・・・」

でも、これ以上誰も巻き込みたくないの・・・」

レイチェルは今にも泣き出しそうな顔でチャイムを見返す。

「ごめんね、チャイム。巻き込んだじゃって・・・」

その顔を見ると、チャイムは言葉より先に体が動いた。おもむろにレイチェルの頭を抱き抱え、そのままベッドに倒しこんだ。

「なーにってんのよ！首を突っ込んだのはあたしの方なんだし。ここまできたら最後まで付き合わせなさいよっ！」

両手でレイチェルの金髪をわしゃわしゃかき回しながら笑う。

「ねっ？」

「チャイム・・・」

くちゃくちゃになった前髪の下でレイチェルは瞳を潤ませる。

レイチェルにはチャイムの明るい優しさがたまらなく嬉しかった。同時に、自分と同じくらい不安であるはずのチャイムに、無理をさせている自分にはがゆさを感じていた。

エアニス達といた間消えていた不安が、二人の胸へと帰ってきた。ずっと同じものを抱えて旅をしていたはずなのに、今の二人にはそれはとても重く感じられた。

## 第04話 差し伸べられた見えない手

エアニスとトキは人気もまばらになった裏通りを歩いていた。時刻は夕方少し前。

エアニスも、あの少女達の手助けをしたくない訳ではないのだ。ただ、素直に事情を話せないレイチェルと、他人への干渉を嫌うエアニスがすれ違ってしまったのだ。エアニスは自分から人の助けになるような事はしないが、助けを求められれば必ず手を差し伸べるという性格だった。

レイチェルが素直に事情を話してさえいれば、エアニスは協力しただろう。トキはそう思っていた。だからエアニスの家を教えたのだ。

「本当に良かったんですか、エアニス？」

小走りでトキはエアニスの背中に追いつく。エアニスは憮然とした表情だ。

「当人達がいいって言ってるんだ。俺達が無理に口を出す事でも無いだろう？」

「そうかもしれませんが、あの娘たち、相当無理していたんじゃないですかね」

「・・・だろうな。まあ、その気になったら向こうからウチを訪ねてくるんじゃないか？」

事も無げに出たその言葉に、ドキリとするトキ。まさかとは思いつつ、シラを切ってみる。

「でもあの娘たち、エアニスの家知らないんじゃないですか？」

「どうせお前、部屋出てくる時に教えたんじゃないか？」

読まれていた。いつもはトキがエアニスの分かりやすい性格をからかう立場なのだが、こういった真面目な駆け引きでは何故かエアニスは鋭かった。

「本当に・・・意地の悪い人ですねえ・・・」

「お前が言うなよっ！」

力いっぱい反論する。性格のエグさでトキにかなう人間はそういないだろう。

「なら、何故自分から住所を教えてあげなかったんですか？」

「ああ言った手前、そんな事言えるかよ」

頬を掻き、少し恥ずかしそうなエアニス。

たしかにあれだけぶっきらぼうな態度を取ってしまった以上、実は心配しているという素振りを見せるのもバツが悪かったのだろう。

「それで僕に言わせたのですか・・・」

「言わせた訳じゃないだろ。お前が勝手に言ったんだ」

全くもってその通りなのだが、この口振りからするとエアニスはトキが家の場所を教える事を分かっていて、自分で話さなかったようだ。現に今のエアニスには勝ち誇った含み笑いが浮かんでいた。

普段、エアニスの性格を手玉に取って遊んでいるトキだが、実は手玉に取られているのは自分の方ではないかと不安になってしまった。

「ところで・・・気付いてますよね？」

街外れまで歩いた所で、突然話を振るトキ。

「ああ。後ろと前の角に一人ずつ、かな？」

二人は自分達に注がれる視線を感じていた。相手の姿が見えなくても、戦いの経験を多く積んだ二人には、相手の敵意、視線を感じ取る感覚が備わっているのだ。

「どうですか？僕が前の相手をしまししょうか？」

「どっちでもいいんじゃない？ どうせ相手は雑魚みたいだし」

「またいい加減な……。そんな事ばかり言っていると、いつか足元すくわれますよ？」

「それこそ、どうでもいい事だ」

それは自分の命を軽んじている故の言葉。

前方の建物の角まで、あと十歩といった所で拳銃を構えた男が飛び出してきた。狙いをまず外す事が無く、かつ相手との距離もそれなりにある距離。だが、男が建物の影から飛び出してくるタイミングを読んでいたエアニスは、既に男との間合いを詰めていた。エアニスの反応の速さに、男は戸惑いつつも銃の引き金を引こうとするが……

がづっ！！

エアニスが振り上げた剣に弾かれ、男の銃は空へと舞った。自分の手から離れた銃に気を取られた男にエアニスは膝蹴りを叩き込む。エアニスの膝は男の肋骨を潜り抜け、みぞおちをえぐっていた。

苦痛にうずくまる男の後頭部に今度は肘を打ち下ろし、男を完全に沈めた。

エアニスが弾き飛ばした銃が、丁度エアニスが立っている所に落ちてきて、吸い込まれるように彼の左手に収まる。

「相変わらず、見事なものですねー……」

何故か呆れた顔のトキ。

「そんな事より、後ろ」

二人をつけていた気配が、背後から一気に迫ってくる。

トキが振り向くと、ナイフを腰だめに構えた男がトキに向かって突っ込んできた。だが、トキはその場から避けようとしなない。

男がトキの胸に向かいナイフを突き出す。が、目の前にいたはずのトキが、突然男の視界から消えてしまった。男が自分の目を疑った次の瞬間。

「よいしょっと」

のんきな声と同時に男の体が浮かび上がる。

はた目から見ると間の抜けた話で、トキは男に刺される直前にしゃがみこみ、突進してきた男の足元を自分の肩と両手で持ち上げたのだった。足元をすくわれた男は勢いもそのままにトキを飛び越え、顔から着地しそのまま地面を顔で滑っていった。

「うわっ、お前ひどいやり方するなあ……」

わざと顔から落としたな？」

顔面スライディングをした男に同情してしまうエアニス。これがトキの意図した事かどうかは分からないが、多分狙ったんじゃないかとエアニスは思う。

「僕はただ転ばせただけです、殴る蹴るがモットーのエアニスよりはずっと大らかだと思います

がね」

「そんな野蛮なモットー持ってねーよ！

って、それよりコイツら、何者だ？

やっぱり、レイチェル達を狙ってた奴の仲間か？」

その言葉に、ハツとして顔を上げるトキ。

「じゃあエアニス、彼女達の元にも刺客が向かっているんじゃないですか？」

「！！」

珍しく焦りの表情が浮かべるエアニス。

もしも宿から尾けられていたのなら、間違いなくチャイムとレイチェルの所にも敵は向かっているだろう。尾行には気を配って二人を宿に連れて行ったつもりだったが、レイチェル達を狙う相手にばれていたようだ。

もし自分のせいで彼女達に何かあったら、さすがに寝覚めが悪い。

そう思った瞬間、エアニスは元来た道を全力で走り始めた。

「あ、ちょっと・・・って、

やっぱりあの娘たちの事、気にしてるんじゃないですか・・・」

ぽりぽり頭を掻きながら、苦笑いを浮かべるトキ。そしてトキもエアニスに続いて駆け出した

。



襲撃のあった場所から、チャイムたちの宿まで多少の距離があったが、エアニスの足では5分とかからずに戻って来る事が出来た。宿の入り口を塞ぐように、軍隊が兵士や物資を運ぶ黒塗りのトレーラーが止まっていた。この辺りで軍用車を見かける事は殆ど無い。チャイム達を狙う相手が拳銃を持っていた事も考えると、あのトレーラーも無関係ではないだろう。拳銃も自動車も簡単に手に入る物ではない。

一つ手前の路地から宿の様子を伺っていたエアニスに、トキが追いついた。

「これはまた・・・予感的中ってカンジですね。どうしますか？」

「面倒なのは嫌いだ。普通に入り口からあいつらの部屋に行くさ」

「そうですね、普通が一番ですよ」

世の中には普通の行動が普通じゃないという状況はいくらでもあるのだが、今は急いで彼女達の元へ行く必要があった。策を巡らせている時間は無い。通りに出て、真っ直ぐに宿の入り口へ向かう二人。入り口には黒いスーツを着込んだ、場違いな雰囲気の方が二人、立っていた。

エアニスは黒服達が見えていないかのようにドアノブに手をかけると、その手が黒服の片割れに掴まれた。

「すみません。ただいま立て込んでおりますので。暫く後に出直して頂けませんか？」

口調はあくまで紳士的で、昼間のごろつき連中の仲間とは思えなかった。

「こっちも急ぎなんだ。離せ。というか触るな」

神経質そうに、エアニスは男の腕を振り払う。

すると、もう一人の黒服がトキの背後に回り込み、エアニス達を挟み込む位置になる。一瞬だけ、相手に合わせ穏便に事を済ませる方法を考えてみたエアニスだが・・・

「ああ、もう・・・

煩わしいんだよ！！悪者なら悪者らしく問答無用で襲って来やがれ！！！」

グシャッ、と生々しい音を立ててエアニスの拳が黒服の鼻を潰した。

「お前っ・・・！」

もう一人の黒服が胸に手を伸ばし何かを取り出そうとするが、それより速くエアニスの剣が黒服を突き飛ばしていた。相変わらず鞘に剣を収めたままなので、死ぬ事は無いだろう。

倒れた二人の黒服を見下ろし、トキは頭に手を当て空を仰ぐ。

「なんとまあ・・・コレじゃあ僕たちが悪者じゃないですか。

というか、今のは余りににも短気過ぎやしませんか？」

「だって、こいつら怪し過ぎだろ！絶対アイツらを狙ってる連中だよ！！」

「分かりませんよ？ ひょっとしたら国家機密を握るレイチェルさん達を保護しに来た、どこかの国の諜報員かもしれません」

「そ・・・そんな小説みたいな展開ないだろ？

・・・多分」

エアニスの声から自信が失われていた。まだこの黒服達が敵だという証拠はない。むしろ、黒服たちの服装や雰囲気だけでは、昼間のごろつきの仲間というより、どこかの国の諜報員といった方が、まだリアリティがあるのかもしれない。

「まあ、もし間違ってたらちゃんと謝るよ。それでいいだろ？」

「謝罪の誠意が欠片も感じられませんよ。

というか、この方達、鼻とか肋骨とか絶対イってますよ。僕なら謝っても許しませんけどね」言葉に詰まるエアニス。暫し反論を考えるも・・・

「・・・疑わしき者には罰を！！」

「居直りましたか」

「おい！ お前達、何をしている！？」

車から三人程の黒服が降りてきた。

「っと、お前とコントやってる暇は無いか」

「けっこう楽しそうじゃないですか？」

「楽しいワケないだろ。行くぞっ！！」

エアニスは鍵の掛けられた宿の扉を蹴破る。

ばむん！と、店内には扉が床に叩きつけられる爆発音にも似た音が響き渡り、外れたドアベルがけたたましく鳴りながら転がっていった。

その音は、体を縄で縛られ床に伏した宿屋の客と、彼らに大型の機関銃を突きつけている黒服集団の注目を一斉に集めた。

「わあお……」

「これはまた盛り上がってますねえ……」

思った以上の面倒事になりそうで、エアニスとトキは思わず溜息を吐いたのだった。



## 第05話 First Game

---

大通り側の窓から聞き慣れない音が近づいて来た。車の排気音である。

「何？あの音・・・？」

田舎暮らしのレイチェルには何の音か分からず、いぶかしげな表情を浮かべる。チャイムは横になっていたベッドから飛び起き、慌てて窓から通りを眺めた。

黒塗りのトレーラーが宿の入り口を塞ぐように止まった。運転席と荷台から黒いスーツを着た男達が静かに降りてくる。人数は十人弱。思わず硬直するチャイム。そのうちの一人、赤毛の短髪の男と目が合った。すると、男の口元が笑みの形につり上がる。

「追っ手よ！！早く荷物まとめて！！」

マントと剣を身に付け、荷物の入ったザックを持って宿の部屋を飛び出る。チャイム達の部屋は宿の三階にあったが、そこからでも下の階で争うような声が聞こえて来た。他の宿泊客も何事かと部屋のドアから顔を出し始める。

「何が人目の多い場所にいれば安全、よっ！！全然大丈夫じゃないじゃない！！」

この宿に案内したエアニス言葉を思い出し毒づく。チャイムもその通りだろうと思っていたが、相手は人目などお構い無しのようなのである。少し遅れてレイチェルが部屋から出て来た。

「裏口に螺旋階段があったわ。そこから外に出れるかも！！」

ここから外に出るには、正面の入り口か、宿の外壁に付けられた螺旋階段の二択しかなかった。

廊下の奥の窓から螺旋階段が繋がる裏路地を覗き込むと、そこには既に目つきの悪い黒服が二人立っていた。チャイムの姿に気付くと、男達は上着の下に手を伸ばし、チャイムを牽制した。上着の中にあるのは、どうせ拳銃なのだろう。

「こっちも駄目ね・・・」

宿の中の階段からは、バタバタと幾つもの硬い靴音が近づいてきた。

「どうしよう、チャイム！？」

チャイムは敵と戦い、ここを突破する方法を考えてみるも、やはり銃を持ち出す集団を出し抜ける自信は無かった。レイチェルの魔導を使えば何とかなるかもしれないが、間違いなくこの建物や、他の客を巻き込んでしまう。

「・・・部屋に戻りましょう、扉にバリケード作って、時間稼いでるうちに表の窓から屋根伝いに逃げるのよ！！」

大通り側の窓から外に出れば、流石に彼らも通行人の目を気にし銃を撃ってくる事は無いだろう。今、大通りからこの宿を見ると、見慣れない車と男達が集まっているというだけで、まさか宿の中で憲兵隊に通報されるような事件が起こっているなんて、きっと誰も思わない。だから彼らも、これ以上衆目を集めるような真似はしない筈だ。そんな読みだった。

部屋に入るなり二人でクローゼットを引き倒し、ソファとベッドで扉を塞ぐ。それと同時にドアが激しく揺さぶられた。

「チャイム、早く！！」

レイチェルが窓を開けようとした時

パンッ！

突然、窓ガラスが内側に砕け散った。

ばづっ！、ぼっ！！

続けて窓の木枠が大きく抉られる。銃声は聞こえなかった。サイレンサーを使っていたのだろうか。

驚いてへたり込んでしまったレイチェル。状況を理解し、チャイムの胸にも絶望感が広がる。発砲音を消す程度の配慮はあるようだが、相手は衆目の目など殆ど気にしていない。それとも既に人払いでもされているのだろうか。

ズドムッ

くぐもった爆発音と共に、部屋の入り口のバリケードが崩れ落ちた。爆弾か魔導か分からないが、チャイム達の耳が少し痛む程度の小さな爆発だった。横倒しになったクローゼットとソファを乗り越えて黒いスーツを着た男達が四人、入ってきた。手には既に拳銃や銃身の長いライフルが握られている。

「レイチェル=エルナーズとチャイム=ブラスハートだな？」

彼等の中から一歩前に歩み出た男が言った。部屋の窓越しにチャイムと目が合った、赤毛の男だった。

「今まで随分と手荒な連中が刺客として向かったようだな。

下の連中には、お前達を見つけたら手は出さず報告だけしろと伝達したんだが・・・手柄を焦った奴が沢山いたらしい。すまなかったな」

赤毛の男は場違いにも落ち着いた声で話し始める。今までチャイム達が遭遇してきた刺客とは明らかに雰囲気違った。

「あら、アンタとあのごろつき達とどう違うのかしら？」

チャイムは言いながら腰の剣を抜く。

「そうだな、じゃあ、取引をしてやろう」

「取引？」

「ああ。だが、俺が取引したいのはレイチェル・エルナーズだ。あんたじゃない」

「・・・」

いきなり蚊帳の外にされ、勢いを削がれるチャイム。

「取引って・・・？」

名指しされ黙っている訳にも行かない。レイチェルは戸惑いながらも赤毛の男の話を促す。

「俺達の目的は分かっているな。君の身柄と、君の持っている"石"だ」

「分かっているわ・・・」

赤毛の男はおもむろに銃口をチャイムに向けた。

「ここで素直に俺達について来れば、チャイム・ブラスハートの命は助けてやろう」

「！！」

「チャイム=プラスハートに用は無い。むしろ、事情を知ってしまった分、消したほうがいい存在だ」

「・・・随分勝手な取引ね」

銃口を向けられながらも強がってみせるチャイム。声は上ずり、さすがに動揺を隠す事はできなかったが。

「そうかな？」

もしこの場をお前達が切り抜けたとしても、そう遠くないうちに次の刺客が来るだろう。

その時の相手が、俺のような取引を持ちかけて来るとは限らないぞ。

むしろ、次はお前も消すようにと命令が出ているかもしれん」

「・・・・・・・・」

「いい加減、"ルゴワール"からは逃げきれないと気づいたんじゃないのか？」

「問題外ね」

剣を構えなおすチャイム。それと同時に部屋に入ってきた黒服たちが一斉にチャイムに狙いを定めた。

「つつ・・・」

強がってはみても、自分達ではこの状況を突破できない事は分かっていた。

どうすればいい。この場から逃げ出すには、どうすればいい。

もし、"彼ら"に助けを求めていれば、こんな事にはならなかったのではないか。そんな思いが頭を駆け巡った。

「・・・分かったわ」

「なっ、レイチェル！！」

彼女の回答に、思わず声を上げるチャイム。

「私達だけじゃ、もう逃げられないわ。散々チャイムを巻き込んだけど・・・今ならまだチャイムは助かるわ」

「駄目よ！！こいつらに捕まったら・・・」

「取引成立かな？」

満足そうな笑みを浮かべる赤毛の男。

だがその顔はすぐに怪訝な表情へと変わった。

下の階で騒ぎ声が聞こえる。部下達の怒号と足音。そして銃声。下階は武器も持たない一般人ばかりで突入と同時に制圧した筈だった。

「なんだ、何の騒ぎだ？」

騒ぎ声が静まったと思うと、今度は窓の外から騒ぎの音が伝わってきた。

「バルザックさん、閉じ込めていた一階の客達です！！外に逃げて行っちゃいましたよ！！」

舌打ちとともに大通りを覗き込むバルザックと呼ばれた赤毛の男。一階に居た人間は宿に閉じ込め、騒ぎをこの建物の中だけで収めるつもりだったのに、これではぶち壊しである。

「何があった？」

「下に行って見て来い」

「はい、」

命令を受けた男が大振りのショットガンを構えて廊下に出ると・・・

「がふっ！！」

チャイム達からは、扉から出た男が突然のけぞって、後ろに倒れこんだように見えた。

「！？」

バルザックに驚きの表情が浮かぶ。チャイムに向けていた銃口をドアの向こうの廊下へ向けた

。

「事情が分からない以上、ひどい怪我させちゃ駄目ですよー」

「わかってるよ、しつこいなあ・・・」

廊下から聞き覚えのある間延びした二人の声が聞こえた。

琥珀色の髪を伸ばした無気力な顔の男。

貼り付けた笑顔に眼鏡をかけた、これといって特徴の無い男。

「よお、なんとか間に合ったみたいだな」

「すみませんね、お取り込みのところ・・・」

エアニスとトキは、さっきまで談笑していたのと同じ調子で部屋に入ってきた。

「あ、あんたたち・・・」

呆気にとられる二人。いくら腕が立つからと言っても、まさかこんな修羅場に現れるとは思ってもみなかった。しかも、下の階の敵を何人か倒してきたようだ。

「お前達か？昼間に追っ手の部下を倒した、こいつらの用心棒とは？」

「用心棒お？」

思わず呆れた声を上げるエアニス。

「なんだか勘違いされてるみたいですが、僕たち雇われてるわけじゃないんですけどね。

こちらのエアニスが勝手に通りかかって喧嘩しただけです」

エアニスは他に言いようが無いのか？と、内心思ったが、大筋間違っただけだったので反論しなかった。

「それだけだとしたら、なぜこんな場所に顔を出す？」

赤毛の男の言葉に顔を見合わせるエアニスとトキ。

自分の助けた相手がまた同じ危機に遭っていると知ったら、放っておけない。

エアニスが今ここに帰ってきた理由はそれだけであった。彼女達の抱える事情に興味があるというのも理由の一つだが、その辺りの心情をこの男に聞かせてやる筋は無いし、彼女達に対しては照れくさいし、何より面倒だった。

「街でゴキブリを見たんだ。で、巣穴が気になってな。街は綺麗な方がいいだろ？」

言いながら剣の柄に手を掛け、先ほど黒服から奪った拳銃を赤毛の男に向けた。

「フン、品の無い奴だ・・・」

話にならないと感じ、バルザックはエアニスとの会話を打ち切る。無論、エアニスにも話し合うつもりは欠片も無いのだが。

彼はレイチェルに向かい、先の話の続きを始めた。

「念のためもう一度聞くが、まだ取引をするつもりはあるか？」

レイチェルは静かに男の目を見返す。

こうなってしまっは自分も後戻りは出来ない。

彼らを信じ、全てを話そう。レイチェルの決心はついてた。

彼女はバルザックの視線を正面から受け止めて、答える。

「あなた達に・・・石は渡さないわ」

「レイチェル・・・！」

嬉しそうな表情を浮かべるチャイム。

エアニスとトキは話置いて行かれて何のことかさっぱり分からずにいた。

「そうか。残念だ。

今回は、俺達が引かせてもらう。

次に会う時はお前達も一緒に片付けられるような面子を連れてきてやるよ」

赤毛の男は取り巻きの黒服に目で合図をすると、部屋の出口へと歩き出す。

「待てよ」

赤毛の男の行く手を塞ぐようにエアニスが壁に足を掛ける。

「このまま大人しく逃がすと思うか？」

トキが男の後ろに回りこむ。

「ダメですよ。ちゃんと憲兵隊が来るまで待ってて貰いますよ。

あ、先に宿のご主人と壊した物の弁償について話し合っておきましょうか？ 逮捕された後ではそういった問題が後回しになりがちですからねえ。

ああ、ついでに貴方達の巣穴の場所も教えて頂きましょうか？」

二人に囲まれてもバルザックの余裕の表情は消えない。

「おい、こいつらに倒された奴を全員連れて先に帰ってろ。この二人は俺が相手をしておく」

面倒臭げに取り巻きの黒服に向い言い放つ。

「馬鹿。お前ら全員役人に捕まってもらうぜ。一人でも帰したら後々厄介だからな」

エアニスはバルザックに向けていた銃口を部屋から出て行こうとする取り巻きに向けた。

バルザックの体がゆらりと動く。

その動きに気づいた時は、バルザックはエアニスとの間合いを一気に詰め、いつの間にか抜き放ったダガーでエアニスの左腕を狙う。

「っ！！」

耳障りな金属と共に、エアニスの銃が天井へ跳ね上げられる。

もう少し気付くのが遅ければ、二の腕を持っていかれていたかもしれない。  
バルザックは常人離れした動きで、胸元がガラ空きになったエアニスに襲う。  
だが、完全に防御しようが無いタイミングで放たれた斬撃はエアニスが腰に下げている剣に防がれていた。

噛み合せていた刃を二人同時に振り払い、互いに間合いを取る。

エアニスとバルザック、この短い攻防で、お互いの力の断片を垣間見て驚愕していた。

普通の強さではない。強さの為にあらゆるものを捨てた、常識から逸脱した者の強さだった。

エアニスにとって、これほどの使い手に会ったのは本当に久しぶりだったのだ。

ぞわり、

と、エアニスの全身がざわめいた。

悪い癖なのだが、強い相手と戦う時、エアニスの体には麻薬的な快感が走る。俗に言う、血が騒ぐ、という物かもしれない。

久々のこの感覚にエアニスの口元に笑みが浮かび、目元から笑いと"光"が消えた。

「へえ・・・

楽しませてくれそうだな」

疼く体を押さえ込み、エアニスは剣を片手にぶら下げ、低い姿勢で構えた。

「じゃあ、ここはエアニスに任せて先に行かせてもらいましょうか？」

トキはまるでクラスメイトを残して先に帰ろうとする学生の口振りでチャイムとレイチェルを促す。

「で、でも・・・」

戸惑いながらレイチェルは遠巻きにエアニスを見る。

お世辞にも広いと言えない部屋で長剣を器用に振り回し、赤毛の男の攻撃を裁いているエアニス。赤毛の男、バルザックの放った斬撃が部屋に飾った花瓶に当たる。僅かに揺れた花瓶が、見事な切り口を見せて花と共に崩れ落ちた。

チャイムもレイチェルも見事がない、まるで人外の戦いである。

「大丈夫ですって、エアニスを倒せるような人間はこの世にそうはいませんよ？」

それでもトキは余裕の表情である。バルザックの剣技を見てもなお揺るがない感情は、よほどの戦いの経験があるのか、エアニスを信用しているのか。あるいは、ただ単に彼女達を心配させないようにしている演技か。

「ほらほら、早くしないとエアニスの犠牲が無駄に・・・」

「犠牲！！？ちょっと待ってよ、あいつ、ひよとして無茶してんじゃ・・・」

「あはは、冗談ですって。ほらほら、早く」

戸惑うチャイムとレイチェルはトキに背中を押されて廊下へ出た。何と無くその手つきがいやらしかったような気がするが、それはチャイムの被害妄想か。

「！！」

チャイムが廊下に出ると、そこには累々と折り重なる黒服達。

「あなた達が全部やったの・・・」

圧倒されたレイチェルが小さく呟いた。

「いやですね、殆どエアニスがやったんですよ」

「・・・死んでるの？」

ふとトキのにやけた表情が消えた。

「エアニスは極力殺しはしない主義なんですよ。大丈夫です」

何が大丈夫なのか、トキは二人の背中を押しながら、階段とは逆の方へ歩き出した。

「どっち行くの？階段逆よ？」

「時間を掛け過ぎました。もう役人や憲兵隊、ヘタをしたら駐留軍が集まってくる頃です。かち合ったら面倒ですからね、屋上から屋根伝いにここを離れます」



ぎ ぎがっギ キン、

絶え間ないバルザックの攻撃がエアニスの長剣を削る。

彼にとって戦いづらい状況であった。

エアニスの武器は1 m少々の長剣。対してバルザックの武器は二刀の細身の短剣。

狭い部屋では思い通りに剣を振るえず、エアニスは防戦に回っていた。エアニスが間合いを開けると、接近戦を狙うバルザックはその分だけ間合いを詰め直す。長剣を持つエアニスにとって短剣を持った相手との接近戦は、最も不得手とするものだった。狭い部屋の中でなければ、あるいは手段を選ばないのであれば、この状況を打破するのは難しくないのだが。

がぎん、

と、バルザックの交差させた短剣がエアニスの剣と噛みあった。

二人の動きが止まる。

「・・・剣の鞘、弁償して貰うからな」

未だにエアニスは剣を鞘に収めたまま戦っていた。既に硬い革で作られた鞘はズタズタに切り裂かれている。

「そんな代金より、自分の葬式代を心配した方がいいんじゃないか？」

「ははっ、葬式代？」

随分と月並みなセリフだ。お前は他の連中と少し違うと思ったが、やっぱその辺の三流雑魚と同じか」

噛みあった剣を斜め後方に払う。このまま力比べに持ち込まれたら、エアニスは不利であった。剣技、瞬発力には絶対の自信があったが、エアニスは純粋な力比べは強くなかった。

エアニスが受け流した力がバルザックの体を泳がせた。

その瞬間を逃さずエアニスは体制を崩したバルザックの後頭部に肘鉄を叩きこんだ。

「ぐっ・・・」

だが狙いが甘かったのか、バルザックが身をよじって急所をずらしたのか、気を失わせるには至らなかった。その隙にエアニスはバルザックから大きく間合いを取った。

一度これだけ間合いを取ってしまえば、もう二度と自分の苦手な間合いへバルザックを踏み込ませる事はしない。もし彼が自分の間合いを取りにエアニスの間合いへ踏み込んで来たのなら、その時エアニスは確実にバルザックを仕留める自信があった。

だがバルザックは小さく舌打ちをすると、素早く背を向けて部屋の外へ逃げてしまった。

あっさりとは割り切った判断に、エアニスは舌を巻く。彼はそのまま突っ込んだら倒されるのは自分だと気付いたのだ。

だがこの狭い戦場から出られるのであれば、エアニスが有利になるのには変わらない。

エアニスはバルザックを追った。

狭い廊下を二人の剣士が駆け抜ける。

エアニスはバルザックの背中を追いながら窓の外に目を配ると、機関銃を持ち、グレーの軍服を着た男達が立っているのが見えた。国の駐留軍だ。騒ぎを起こした相手が銃を持っていたのだから、彼らが出張って来るのもおかしくはない。宿の外に停まっていた黒いトラックはもう見え



ない。バルザックの仲間達には逃げられてしまったようだ。

「ったく・・・毎度毎度使えない連中だな・・・」

エアニスとは国の軍隊にあまり良いイメージを持ってはいなかった。彼らよりもバルガスのギルドにたむろしている金に困った旅人達の方がよっぽど使える。

軍が持つ銃火器の制圧力は認めるが、彼らが来る前にその相手が逃げてしまっただけは何の意味も無い。頭のいいお偉いさんばかりで成り立つ組織ほど愚鈍なのである。

バシャアァン！！

ガラスの砕ける音。

他所に向いていた意識を戻すと、バルザックは三階の窓ガラスを突き破り外へ飛び出していた。

砕けた窓ガラスから外を伺うと、バルザックは隣の建物の屋根に飛び移っていた。隣の建物との距離は5、6メートル離れ、その屋根は3階の窓より1フロア分低い。それでもなかなか真似の出来る事では無かった。バルザックはそのまま背を向けて屋根の上を走り去る。

「へえ。やるじゃん！」

妙な所で感心しながら、エアニスも窓から身を乗り出し、壁を蹴って隣の家の屋根へと跳んだ。

その瞬間を待っていたかのように、バルザックがエアニスに振り向いた。

その右手には赤い光が灯っていた。

「・・・げっ！」

それは、魔導の光だった。

「広い戦場が有利なのは俺も一緒なんだよ！！」

右手を大きく振りかぶり、バルザックは光の球を投げ放った。赤い光球は見る見る大きくなり、輪郭をいびつに歪ませ炎を撒き散らしながらエアニスに迫る。

「くそっ！」

隣の建物へ飛び移るため空中にいるエアニスに身をかわす術は無い。しかし彼は踏ん張りも何も利かない空中で、苦し紛れのように鞘に入ったままの剣を向かい来る火球に叩きつけた。

ボガッ！

炎を散らし、バルザックの放った火炎球はエアニスの真上に弾き飛ばされる。

「なっ！！」

バルザックは驚き、空高く打ち上げられたそれを見上げた。そして、目も眩む閃光が周囲を包む。

一呼吸の間を置き火球は爆発して、夕刻の空を更なる紅蓮に染めた。

「なんだと・・・！？」

放心するように立ち尽くすバルザック。もともと今の魔導は、火球に何か衝突する事で爆発し、火炎を撒き散らす魔導である。当然、剣で叩き返すものならその場で大爆発を起こす

筈だ。

ただの剣ならば。

「痛えな・・・尻から落ちちまったじゃねえか・・・」

エアニス足元に剣を突き立て、杖をつく様にして立ち上がった。空中で火球を打ち返した為に姿勢を崩し、着地に失敗してしまったのだ。

彼は赤い夕日と炎に焼かれた空を背にして立つ。

得体の知れない力を持つ、黒く禍々しいエアニスの影。それはバルザックの心に恐怖を感じさせた。

バルザックは次の攻撃を忘れ、エアニスの握る剣を見る。

剣を覆っていた鞘は墨になり、刀身をあらわにしていた。

赤黒く、艶の無い両刃の長剣。ざらざらとした石や鋳物のような質感だが、刃の部分だけは金属の輝きを見せていた。薄く平たい剣の腹には見た事の無い文字が刻まれている。

どう見ても近代のセンスで作られた剣ではない。

「・・・魔法剣か？」

バルザックの問いかけに、黒い影は不気味に首を傾げるのみだった。

夕日と炎による逆光のお陰で、尻の痛みに涙を滲ませる顔が影で隠されていたのはエアニスにとって僥倖だったのかもしれない。

「クッ！！」

恐れに駆られて、両の手のひらを足元に向け、呪文を唱えだすバルザック。

乱れ狂う魔力の流れはエアニスにプレッシャーをかけた。

「無駄だ、呪文の詠唱を待ってやると思うか！！」

低い姿勢でバルザックにダッシュをかけるエアニス。この短い時間で発動できる魔導などたかが知れている。大技が来ない以上、たとえ術を放たれても剣で弾き返す自信はあった。

しかし。

バキバキベギッ！！！！

両者の間の地面・・・いや、足元の屋根に亀裂が入った。

「！！？」

一瞬何の魔導か分からずに足を止めるエアニス。ぐらり、と足元が傾いだ瞬間、その正体が分かった。

重力の魔導だ。バルザックはこの建物に重力をかけ崩壊させる気でのいるのだ。

「マジかよっ！！」

ぐわっしやああああっっ！

轟音と砂煙を上げて崩れゆく建物。

その瓦礫にエアニスとバルザックは飲まれていった。



ずずずん・・・

また宿の方角から大きな音が聞こえてきた。

音のした方角を見ると、もうもうと煙が上がっている。

ミルフィストの街は騒然としていた。

「またハデにやってるみたいですねえ・・・」

ほんの少し前には同じ場所で火柱が上がっていた。

苦笑混じりに呆れた声を上げるトキ。

その表情には相変わらず心配のカケラもない。

「ね、ねえ・・・ホントにあいつ大丈夫なの？」

屋根伝いに宿から離れ、人気の無い水路沿いをトキとチャイム、レイチェルは走っていた。

流石に心配になってきたチャイムは、トキに何度目かの同じ質問をした。レイチェルもチャイムと同じ表情を浮かべている。

「だから大丈夫ですよ。

それより、そろそろ自分達の心配をした方がいいみたいですね」

「え？」

その意味が分からず、チャイムとレイチェルが間の抜けた声をハモらせる。だがそれはすぐに分かった。

車の駆動音が近づいて来たのだ。後ろを振り向くと、宿の前に止まっていた黒いトレーラーがこちらに向かって走って来た。

「あいつら・・・！？」

「みたいですねえ・・・」

どこまできても緊迫感の無いトキを思わずジト目で見てしまう二人。

「何ですか・・・嫌ですね。僕は少しでもこの場の空気を和ませようかと・・・」

「あんたの笑顔は胡散臭くて全然安心できんわぁっ！！」

この男は死ぬその瞬間まで、こうしてへらへらと笑っていそうだった。そんな人間の表情など何の励ましにもならない。チャイムに怒鳴られ、トキは初めて悲しそうな表情を見せた。

ばづっっ！

三人のすぐ横手にあるレンガ塀に銃弾が食い込んだ。

同時に、トキはチャイムとレイチェルを路地裏に突きとばした。

「じゃ、ちょっとは信用できるトコお見せしますから、そこに隠れててください」

そう言うと、おもむろに鞆から大学で使っている教科書を取り出す。

「・・・！？」

トキの意図が読めず、チャイムとレイチェルは眉を寄せる。

「ああ、違う。これじゃないです……。何処に仕舞いましたっけね？」

「ちょっとちょっとちょっと！！」

ごそごとと鞆を漁るトキの袖を、チャイムは迫り来るトラックに視線を釘付けにしながら全力で引っ張る。

「ああ、ありました」

「！！？ ちょ……。！」

そう言っておもむろに取り出したのは、宿の黒服連中が使っていた拳銃である。

闇取引で多く流通するリボルバー式古臭い銃でなく、オートマチック式の連射可能な近代的な銃だった。

迫るトラックから男がトキに向かって機関銃を乱射しているが、トキはそれに構う素振りも見せず、拳銃を片手で構えた。

パン、パン、

間隔を空けて放たれた二つの銃弾。

すると少し遅れてトラックが蛇行を始めた。トキの銃弾は、見事にトラックのフロントタイヤを捕らえていた。

チャイムは驚いてトキの顔を見る。そこには相変わらず笑みを浮かべる彼の横顔があった。

たまたま手に入れた銃を、素人がとりあえず撃ってみた、などと言う行動の結果ではない。彼は銃の扱いに慣れていた。

「おおっ！？」

チャイムが見ていたトキの表情が驚愕に変わり、彼は慌ててチャイム達のいる路地に駆け込む。

それと同時に横転したトラックが彼の立っていた路地の壁を削りながら転がって行き、ど派手な爆音を上げて突き当たりの建物に衝突した。トラックの破片が大量に飛び散り、ガン、ガンと石畳やトキ達が身を隠す壁に当たる。

青ざめるチャイムとレイチェル。

「トキさん……。やりすぎですよ……」

何故か申し訳無さそうなレイチェル。トキはブンブンと首を振り、

「いやいや、僕もここまでやるつもりは……。まあとにかく、行きましょうか」

トラックの中に何人乗っていたか知らないが、あれでは無傷でいられないだろう。横転したトラックを横切り、水路沿いの通路に上る。

「この水路を抜ければ街の外に出られます。そこから少し山を登ればエアニスの家がありますから」

そこで言葉を切ると、トキはレイチェルの腕を掴んで体を自分に引き寄せる。

次の瞬間、レイチェルの居た空間を銃弾が貫き、後ろの壁に小さな穴が穿たれた。レイチェルの背筋が凍りつく。

「……。いい加減、しつこいですね」

トキの声には少し苛立ちが感じられた。

チャイムとレイチェルには敵がどこにいるか分からなかったが、トキは迷わず銃口を上方へ向ける。その方向に、建物の屋上からこちらを狙う黒服がいた。長距離ライフルで狙撃してきたのだ。トラックの襲撃も考えると、どうやらこの場所で待ち伏せされていたようだ。

トキは少しだけ慎重に狙いを定め、200mは離れている狙撃手に向け発砲する。

「ちょっと、無茶よ！！」

チャイムは声を上げたが、次の瞬間、遠くに見える敵の人影は、足元から崩れ落ちるように倒れていった。

「・・・うっそ！」

思わず目が釘付けになるチャイム。

さっきのトラックを止めた事といい、トキの射撃の腕は異常である。

がっつ

鈍い音に視線を向けると、いつの間にかトキは鉄パイプを持った黒服と組み合っていた。鈍い音は、鉄パイプをトキが両腕で受け止めた音のようだ。

トキは男の鉄パイプを両腕で押さえ込みながら、銃を手首だけで男の足に向けた。

ガチン

金属を叩く硬い音。弾切れである。

トキが動揺した際に、男は鉄パイプを振るった。その先端がトキのこめかみを掠めてゆく。

小さく聞こえた靴が砂を踏む音。

レイチェルは後ろに生まれた気配に振り向くと、そこにはナイフを持った黒服が迫っていた。

「石を渡せっ！」

男の指が、レイチェルの首飾りに引っ掛かった。

バチン

首飾りのチェーンが千切れ、レイチェルの胸元の"石"は一度地面で跳ねて水路へ落ちていった。

「！！！」

トキを除く全員が声にならない声を上げた。

ドガッ！！

トキは注意の逸れた黒服の顎に掌を叩き込み、気絶させた。

「チャイムさん、後は頼みますよっ」

その言葉だけを残すと、トキは迷わず水路に飛び込んでしまった。

「うそっ！！ ちよっとお！！」

水路の流れはかなり速い。水の透明度も低く、この中から石を探し出すのは難しいだろう。

「チャイムっ！！」

レイチェルの呼びかけに我に返ると、最後の一人の刺客がナイフを振りかざし向かってくる所だった。反射的に右手の大剣で受け止め、男の腹に蹴りを叩き込む。だが当たりが甘かったか、刺客は何事も無かったようにナイフを突き出してきた。

(やっばっ・・・)

チャイムも立ち回りに都合の悪い大剣を捨て腰の短剣を抜き、男のナイフを裁きにかかる。

チャイムは正直、剣技に長けてはいない。チャイムの戦いのスタンスは、大剣による力任せの一撃がメインだ。短剣も持ってはいたが、使い慣れているわけではない。

たたんっ

軽快な足音と共にレイチェルがハンマーロッドを両手に男に踊りかかる。

がざん

男が咄嗟に飛びのいた場所に、レイチェルのハンマーが食い込んだ。間髪いれずにレイチェルは背中を支点にロッドを回転させ、勢いをつけそれを男に投げつけた。

レイチェルの技が予想外だったか、男の反応は遅れ、回転するロッドの端が男の足をすくった。レイチェルはロッドに繋がった細い鎖を引きその回転を止める。するとロッドは意思を持っているかのように宙を舞いレイチェルの手元へと戻ってくる。レイチェルは再び手にしたロッドを突き出し、バランスを崩していた男を突き飛ばす。

レイチェル達がいるのは場所は道路と水路を分ける壁の上にある作業用通路。男はそのまま下の道路へ落ちて行った。

そこそこの高さではあるが、頭から落ちたという事も無さそうなので死んではいないだろう。

安堵の溜息をつくチャイム。

「さんきゅー、レイチェル」

レイチェルはハンマーロッドを手に、苦笑いを浮かべる。レイチェルのハンマーロッドを使った体術はちょっとしたモノだった。

「それより、トキさんは!？」

ハッとして水路に目を向ける。水は少し離れたトンネルへ続いている。二人は流れの下流に向かい、トキを探して歩き出した。

「・・・沈んでないでしょーね」

「不吉な事言わないでよ・・・」

不安そうに二人が水路を覗き込んでいると、

ざばっ

水音に振り返ると、少し下流の水路からトキが上がってきた所だった。

「トキさん!」

ずぶ濡れのままいつもの笑顔を返すと、その手にはレイチェルのネクレスが握られていた。

「大切な物みたいでしたからね」

咳き込みながらレイチェルにネクレスを手渡す。

トキの二の腕とこめかみから血が滲んでいた。

「血が・・・！」

「大したことありませんよ。それより追っ手は？」

「あ・・・今の所は全員振り切ったみたいだけど・・・」

満足そうに頷くと、トキが水路の奥を指す。

「このまま水路を行けば街の外です。傷の手当てはエアニスの家に着いてから優しーくお願いしますね」

この期に及んでまでふざけているトキに、チャイムとレイチェルは顔を見合わせ少し笑ってしまう。

「それでは、行きましょうか。暗いので足元に気をつけて下さいね」

トキが明りの届かない水路の奥へと歩き出す。

チャイムとレイチェルは顔を見合わせる。

真剣味の無いトキの態度に呆れていた所だが、ここまで徹底的に場の空気をとぼけさせてしまうのは呆れを通りすぎで関心してしまう程だ。その余裕に伴う頼もしさも少しだけ見せてくれたというのも理由の一つだろうが。

そんな彼の背を追って、彼女達は暗闇の中を歩き出した。

## 第07話 始まりのおわり

---

すっかり日も暮れた頃、トキとチャイム、レイチェルはエアニスの家に着いた。

「よう、遅かったな」

「全く何事も無かったかのような雰囲気ですね・・・」

既に家に戻っていたエアニスが、グラスを片手にラフな格好で疲れきった三人を優雅に出迎えたのだった。

チャイムとレイチェルがリビングに通されると、キッチンからはシチューの香りが漂っていた。

「ちょっと待ってろ、帰りに街で食べそうな物みつくるってきたんだ」

料理中だったらしく、エアニスはキッチンへ戻っていこうとする。が、そこで眉をひそめ3人に振り返った。

「・・・なんか臭わねえか？」

居心地悪そうに部屋を見回していたチャイムとレイチェルがギクリと表情を強張らせる。

「ええ、追っ手の目を避けるために地下水道を通ってきたので・・・そのせいですね」

トキが簡単に事情を説明した。

水路と言っても、ミルフィストはそこそこの都会である。あまり水がきれいでもないし、生活排水だって流れている。トキは水路に群がるネズミやごきぶりに大騒ぎするチャイムとレイチェルを連れて街の外まで逃げのびたのだ。

刺客の相手をするよりも、二人を街の外までエスコートする方が苦勞したと思うトキだった。

「汚ねーな。風呂も沸いてるから先に入って来いよ」

至り尽くせりである。

常識離れた強さを見せたかと思うと、今度はやけに家庭的な一面を見せて来た。街に住み生活する人間なのだから当然の側面なのだが。一体この男のギャップの激しさは何なのだろう。そう思うチャイムとレイチェルだった。

「そーだな。着替えが一番困るな。」

俺やトキの服なら洗濯したのがいくらでもあるから、適当なのを・・・」

「エアニス」

チャイムが言葉を遮る。

「なんだ？」

エアニスはとぼけた仕草でチャイムに振り返った。

「あの剣士とは、どうなったの？」

「ああ、あいつね、」

肩をすくめ溜息をつく。

「悪い。逃げられちゃった。あいつ、魔導士だったわ。」

建物ごと潰されて、俺が瓦礫に埋まってるうちにどっかに消えちゃった」



「瓦礫に埋まったって・・・！ 怪我は！？」

「痛かったけど大した事無いよ」

ヒラヒラと手を振り答えるエアニス。確かに彼の体に怪我らしい怪我は見当たらない。多少の擦り傷くらいあってもよさそうなものだが。

「エアニスさん、トキさん。本当にすいませんでした」

突然レイチェルが改まって頭を下げる。

「全く見ず知らずの方をこんな危険な事に巻きこんでしまって、その、私・・・」

「あ一分かった分かった。話は後で聞いてやるから、さっさと風呂入って来い。

いつまでも臭う服で部屋に居られると迷惑なんだよ」

手近にあったホウキで三人を突つきながら廊下へ追い出すエアニス。

「あっ、え、でも、ちゃんとお礼を言いたくて・・・」

「別に話は明日でもできるだろ？」

今日は早く休め。ここに居る以上、ある程度の身の安全は保障してやるからさ」

「・・・はい」

ぶっきらぼうな言い方だが、心苦しいほどの優しさを感じた。

その心遣いに、レイチェルは大人しく頷く。

「ん。じゃ、トキ、適当に案内してやってくれ。部屋は上の空き部屋使えばいい」

「わかりました」

リビングの戸を閉め、トキは二人を促した。

「レイチェルさん、駄目ですよ」

トキはレイチェルの顔を覗きこみ、指を立てながら言った。

「え・・・??」

「エアニスはテレ屋さんですからね、面と向かって礼を言われるのがダメなんですよ。

すぐにああやって話をはぐらかそうと・・・」

がおん！！

突然飛んできたナベがトキの頭に直撃した。

「余計な事言うな馬鹿！！！」

いつの間にかリビングのドアからエアニスが顔を覗かせている。

「相変わらずの地獄耳ですね・・・」

頭に被さったナベをエアニスに返しながらかく。不機嫌そうにナベをひったくり、ぶつけてへこんだ部分を気にしながらエアニスはキッチンへ戻っていった。

「あんたたち、いいコンビだわ・・・」

小さく笑い出すチャムとレイチェル。それにつられて、トキも笑った。

エアニスとトキと一緒にいると、どんな状況下でも空気が緩んでしまうようだ。

その後、チャムとレイチェルは浴室から出ると、髪も乾かさず倒れ込むように眠ってしまった。朝から色々な事があって疲れきっていたのだ。見ず知らずの男の家に転がり込んでしまっ

た訳だが、二人は久し振りに安心して眠る事ができた。

「・・・で、結局またお前と二人きりの夕食かよ・・・」

「はて？何か不満ですか？何も変わらない、いつも通りの事じゃないですか。

美味しいですね、今日の料理。」

「・・・いい、何でもない」

エアニスは自分の作ったスープを飲む。我ながら絶品だった。気張って作ったのだからこのくらいの味は出ていないと困る。

立場的な事を考えれば彼女達にここまでする筋合いなど無いのだが、ここ暫く人との関わりを断って暮らし、人恋しくなっていたエアニスにとっては、今日の晚餐は楽しみにしていたイベントだったのだ。

基本的に人間嫌いなエアニスだが、本当の孤独を望んでいる訳でもない。その辺りの心理は自分でも良く分らない程に複雑なのだが、ともあれ。期待していた久しぶりの賑やかな食事は、明日以降に持ち越しとなった事にエアニスは肩を落とすのだった。



いつもと少しだけ違う夜が明けた。

今日一日大学の講義が無いトキは、朝から溜まっていた洗濯物を干している。エアニスは朝食を食べると剣を片手にふらりとどこかへ消えてしまった。昨日転がり込んできた少女達はまだ寝ているようだ。起こす理由もないので、トキはそのままにしている。

全ての洗濯物を干し終え、トキはベンチ代わりに切り株に腰を掛けた。

少しだけ肌寒い風が木々を揺らし、木の葉が舞い散る。

山奥の秋をを感じさせる日であった。

「暇ですねえ・・・」

大学の講義も無いし、街に散歩に出ようにも物騒な連中に狙われている少女達から離れる訳にもいかない。洗濯や掃除など溜まった家事を全て片付け、やる事が無くなってしまったのは昼少し前の事だった。

「おはよ」

不意に掛けられた挨拶に顔を上げると、チャイムとレイチェルがドアから顔を出していた。

「ああ、おはようございます」

「すみません、寝坊してしまったみたいで・・・ご迷惑でした？」

やはり申し訳無さそうに謝るレイチェル。どうにも彼女は腰が低く、トキは接し辛い。自分の言葉遣いも人の事は言えないのだが。

「まさか、でも、丁度一人で退屈していた所ですよ」

ぱたぱた手を振り、愛想良く答えるトキ。

「ねえ、トキ。えっと、その・・・」

チャイムが歯切れの悪い口調でトキの名を呼ぶ。

はっきりした性格の彼女にしては妙な物言いだった。

「なんですか？」

「えーっと・・・わ、私たちの服ってどこに行ったか知らない・・・？」

チャイムとレイチェルは、昨晚トキに渡されたサイズの合わない厚手の貫頭衣類とズボンを着ていた。自分の服は脱衣所で脱いだ後、放りっぱなしにしたままで眠ってしまったのだ。朝起きて服を回収に行くと、脱衣所に自分達の服は無くなっていた。

「ああ、それでしたら・・・」

トキが家とは逆の方向に視線を向ける。すると木立に掛けられたロープに、チャイムのマントやら上着やらスカートやら下着やら下着やら下着やらが綺麗に洗濯されて、ぱたぱたと風になびいていた。

「洗濯物溜まってたんで、一緒に洗っておきましたよ」

ニコニコさらりと答え、トキがチャイムの方へ視線を戻すと、チャイムは洗濯物を見つめたまま、ひきつった顔でトキを睨みつけていた。

奇妙なチャイムの表情に首を傾げるトキだったが、すぐに思いついたかのように手を叩く。

「心配しないでください、下着の方は洗濯機で洗うと痛みそうだったので、ちゃんと手洗いしておきましたので」

「そおいう事を言いたいんじゃないわあっ！！！！」

ガスッ！！

チャイムが放った渾身の右ストレートはトキの左顎を捕らえ彼を大地に沈めた。



「あんた、なんっつーデリカシーの無い事すんのよっ！！この変態！！エロメガネ！！！」

「ああ、すみません。このメガネは伊達なんですよ」

「だから聞いてないそんな事ッ！！！」

顎への一撃が効いてガクガクと膝を震わせるトキの脳天に、チョップの追い討ちがかかる。

「い、いいじゃない、何でそんなに怒るのよチャイム？」

トキさんがせっかく洗濯してくれたのに、ひどいわよ・・・」

トキを助け起こしながら、心底不思議そうにレイチェルは抗議する。世間知らずなレイチェルには、見ず知らずの男に下着を洗われるという事に抵抗が無いらしい。

「あ、あんたも、も一少し恥じらいっていうものを・・・

いや、も・・・、もういいや・・・」

朝なのにどっと疲れが出てきて腰を下ろす。

駄目だ。この二人天然だ。

チャイムがうなだれていると、後ろには笑みを噛み殺しているエアニスが居た。

「あんた、いままでどこにいたのよ・・・？」

「朝の散歩だ」

そう言いながら煙草に火を付けた。エアニスの腰にはちゃっかり剣がぶら下がっている。散歩に行く恰好には見えなかった。

「まあ、大目に見てくれよ。トキも悪気や下心があるっていう訳じゃないからさ」

トキの肩に腕を回し、彼の頭をポンポン叩きながら言う。

チャイムは真っ白な目でトキを見やり、どうだか・・・と呟く。エアニスはトキに向き直ると

、

「お前、チャイムに何で殴られたか分かるか？」

「右ストレートですか？」

「違う！ そういう質問じゃない。

"なんでチャイムを怒らせたか分かるか?"って聞いているんだ」

トキは困り果てた顔で考えて、

「・・・分かりません」

「って事だ。許してやれ。

こいつは他人の下着を触る事が相手にどう思われるのか分からないんだ」

「どういう教育受ければそうなるのよ・・・」

「一流の英才教育だな」

「?なにそれ・・・」

エアニスの言葉の意味を追求せず、チャイムは話を切り上げて腰をあげた。

「メシ食ったか？ 昨日作ったシチュー、一晩寝かせた分いい味でてるぞ」

「あ、うん、ありがとう。頂くわ」

その言葉を聞くと途端に空腹感が沸いてきた。チャイムもレイチェルも、昨日の昼から何も食べていなかった。

「わかった。キッチン来い、手伝え」

「あ、私達がやります。エアニスさんたちは休んでいてください」

「そうか？ 悪いな」

エアニス、レイチェル、チャイムに続き、一体何が悪かったのか、何を反省すればいいのか分からないトキが肩を落として家の中へと入っていった。



朝食とも昼食とも呼べない食事を終えトキが淹れた紅茶を飲んでいて、レイチェルが話を切り出した。

「エアニスさんとトキさんは、今日何か予定はあるんですか？」

「ん、別に？」

「僕も大学の講義は今日ないので暇ですよ？」

二人の返事を聞くと、レイチェルはカップを置いて居住まいを直す。

「少し長くなりますが・・・お話を聞いてもらえないでしょうか？」

「・・・」

レイチェルの硬い声に顔を見合わせるエアニスとトキ。

「今更、だよなあ・・・」

「ですよねぇ・・・」

どばんっ！！

「茶化さないでちゃんと聞いてあげなさいよっ！！」

机を叩いて怒るチャイムに二人は慌てて姿勢を正してレイチェルに向き合った。

「っても、大体見当は付いてるんだけどな」

吸っていた煙草を灰皿に押し付け、やっと真面目な表情になるエアニス。

「昨晚、トキからも少し話を聞いた。奴らの狙いは、あんたのその黒い首飾り。

・・・それ、"石"、なんだって？」

「え！ はあ、そう、石・・・なんですけど・・・え？」

明らかに動揺して言葉に詰まるレイチェル。"石"という言葉が持つ意味は、彼女にとって複雑なものであり、エアニスがどちらの意味合いでその言葉を使ったのか分からずに戸惑ってしまったのだ。

「魔導をやってる奴や、裏社会の奴は、"石"って呼んでるんだよな、ソレ」

レイチェルの胸元にかかった黒い首飾りを指差し、落ち着いた口調で言う。

「その黒い石の中に閉じ込められたもう一つの"石"が狙われてるんだろ？」

エアニスの言葉に固まってしまうレイチェル。

「なんで・・・そんな事まで・・・？」

知っているのだろう。

レイチェルの目が不思議そう、というより疑惑に満ちた視線に変わった。随分と詳しい事を言い当てられたので、驚きよりも、エアニスたちが自分達を狙う組織と繋がりがあるのではないかと思ってしまったのだ。

「お前らが無知なんだろ。」

それと、これは推測なんだけど、レイチェル」

「は、はい」

「エルカカの出身か？」

「！！！」

エアニスの質問に対し、両の手を口元に当て言葉を失うレイチェル。その肯定の仕草にエアニスは左手を頭に当てて溜息をつく。目の前に現れた運命の悪戯を、様々な思いを胸に睨め付ける。

「・・・やっぱりな。エルカカの連中は、"石"をブラックオニキスに閉じ込めてその力を封印、石の力を隠蔽する方法を取っていた。もしかして、と思ったんだけど」

「エアニスさん、あなた一体・・・」

「大したことじゃ無い。昔、旅の途中にお前の村で世話になったんだ。2年と半年くらい前の事か。

お宅の族長にも会った事あるぜ」

「お父さんと！？」

その言葉に今度はエアニスがかが驚き、腰を浮かす。

「あんた、シャノンの・・・あのおっさんの娘か？」

はあ・・・じゃああの時、俺達会ってたのかもしれないな・・・」

これは予想外だった。エアニスはつい話から脱線してしみじみと世間の狭さを実感していた。

「元気か、あんたの親父さん？」

だがその問い掛けに、レイチェルは答える事が出来なかった。

少しだけ視線を伏せ、次の言葉を上手く紡げずにいるようだ。

「・・・え・・・？」

良くない事を聞いてしまった気がした。エアニスも同じ様に言葉に詰まってしまう。

「あの一・・・」

長く落ちた沈黙にトキが割り込んだ。

「石の話は僕も予感していました。でも、そのエルカカって所から僕には話が全然見えてこないんですけど・・・」

小さく深呼吸をして、レイチェルが再び硬い口調で話しを続けた。

「そうですね、では、最初に私の生まれた村の話から始めさせてください」

そしてレイチェルはエアニス達に事情の説明を始めた。

自分の生まれ育った村の事。

一族が背負った宿命の事。

ルゴワールという組織に村を焼き払われた事。

旅の目的。

その話はエアニスとトキにとって運命を感じさせるものだった。

昨日、ほんの偶然で出逢った彼女の話には、  
かつて未練を残したまま断ち切ってしまった、  
自分達の"過去"が垣間見えたからだ。

レオニクル大陸の端に連なるアンバー山脈。  
その山脈の裾に、人里から離れた小さな村があった。  
レイチェルの故郷、エルカカ。  
地図にも載らず、存在さえあまり知られていない隠れ里。  
エルカカには、村人だけが知る一つの秘密があった。

その日は朝早くから村で騒ぎが起きていた。  
外からのざわめきにレイチェルは目を覚ます。

「なに・・・？」

薄日の差し込む窓から顔を覗かせると何人かの村人達が村で一番大きな屋敷、このレイチェルの家に集まっていた。

部屋を出ると、丁度レイチェルの父親が廊下を走り彼女の部屋へと滑り込んできた。

30代前半ばだが、年の割りには若さの残るレイチェルの父親。若くしてエルカカの村を取り仕切る立場にあった。

「ど、どうしたの？お父さん??」

レイチェルの父は、喜び紅潮した顔でレイチェルに言う。

「聞け！！レイチェル、最後の"石"が見つかったぞ！！」

突然の報せに、未だに残る眠気も吹き飛んだ。



ヘヴンガレット。

250年前、かつてこの世界に"魔物"と言う種が跋扈していた時代。

ある日突然歴史に現れたエレクトラという名の魔導師が、魔物を始めとした人と相容れぬ全ての異形を、たった一人で此処とは別の異世界、"レッドエデン"へと追放してしまったという言い伝えがある。ヘヴンガレットとは、その魔導師が持つ杖に収まっていた魔導石の事だ。

しかし魔導師が魔物をこの世界から追放する時、"石"は彼の膨大な魔力に耐え切れず、7つに砕けて世界中に飛び散ってしまったのだという。

かくして世界から魔物という脅威が消え去り、そして新たな火種が生まれる。

人々は強大な力の宿る"石"の欠片を探し求めたのだ。そして、欲望と力を持つ者達の間で、争いが起きる。そして今も何処かで"石"を巡る争いは続いているのだという。

ここまでの、この世界に住む者であれば誰もが知っている、大魔導師エレクトラのおとぎ話だ。様々な伝説や、地方によってあらましの違う言い伝えがあったりと揺らぎの多い話であるが、大筋は変らない。



250年前の出来事は、おとぎ話と呼ぶ程昔の出来事かと言えば意見が分かれる所であろうが、この世界で活版印刷が発明されたのはほんの数十年前の事である。それ以前の史実は口伝や手書きの書物、さらにそれを写した写本など、今の時代から見るととても信頼の置けないあやふやな物だった。

だからこの世界では、250年前の出来事も現実味の無い遠い時代のおとぎ話として映るのである。

そして、ここからがエレクトラに連なる者達しか知らない、隠された歴史。

世界を救った代わりに、新たな争いの火種を生み出してしまったレクトラは、当の本人も砕けた石を集める旅に出たものの、残りの生涯全てを費やしても、たった一つの欠片を見つけただけでこの世を去ってしまった。

やがてその志はエレクトラの子供と、仲間達へと引き継がれてゆく。

いつしか彼らは人里離れた地に旅の拠点を作り、今も彼の意思を継ぎ"石"の欠片を探し続けているのだ。その使命を背負った者の子孫が、今のエルカカに住む村人達である。

そして、この村の族長であるレイチェルの父は、大魔導師エレクトラの直系の子孫であった。無論その娘であるレイチェルも、その大魔導師の血を継いでいる。



そして今日。

ついに7つ目の石、最後のヘヴンガレットが見つかったのだ。

5つ目の石が見つかったのが7年前であり6つ目の石が見つかったのは2年半前である。250年続くエルカカの歴史に無い、立て続けの発見だった。

レイチェルの家の大広間に、十人程の村人達が集まっていた。エルカカの民の多くは世界中に散って石の手掛かりを探して旅をし、数年に一度、村に様々な情報を持ち帰る。ここに居るのはそんな旅人達を束ねる村のグループリーダー的な面々だ。彼らが囲んでいる机には、けさ旅から戻った仲間が持ち帰ったヘヴンガレットの最後の欠片が置かれていた。

「間違いない・・・本当に最後の石だ・・・」

男の一人が、感慨深く言った。

「250年も続いた我々の役目も、これで終わりか。」

何か寂しいものなの・・・」

ぎらぎらと強烈な魔力を放つ石を眺め、村人たちは感慨にふける。250年間、村人全員で背負ってきた役目が遂に終わるのだ。この出来事に何も感じないエルカカの民はいないだろう。

「何を言ってるんですか。」

これから最後の大仕事が始まるじゃないですか」

レイチェルの父が明るく、それでもどこか神妙な口調で皆に話す。

「すぐにでも石を封印する為に旅立とうと思います。

レインバークさん、ヴィッツさん、ご一緒願いますか？」

今まで集められた石は、代々の族長のみが知るという秘密の場所に安置されている。

エルカカの民の目的である、ヘヴンガレットの完全な封印は、石の欠片が全て揃った時でなければ不可能だと伝えられているからだ。現に、これまでも様々な方法で石を破壊しようとしたが、欠片を破壊する事も、封印する事も、いまだかつて出来た者はいない。

全ての石が集まった時、その力を使って、250年前エレクトラがそうしたように此処とは別の世界、"レッドエデン"へとヘヴンガレットを放逐するのである。

「では、そうですね・・・明後日には出発しようと思います。

順調に行けば、1ヶ月程で帰って来れる程でしょう。

ですが・・・」

族長はここで言葉を切ると、

「石を持ち帰った仲間によると、石を狙う勢力と争ったといいます。魔導師ではなく、近代的な武器を持つ一団だったそうです。

追撃を完全に振り切って村へ戻ったらしいですが・・・用心するに越した事はありません。戦える用意はしておいてください」

珍しい事では無かった。

ヘヴンガレットの存在は、一般ではただの伝承、おとぎ話として捉えられている。だが"石"の存在を確信し、そのおとぎ話を信じる者がいるのだ。幾度と無くエルカカの民は"石"を求める勢力と戦ってきた。

"石"の価値は世界情勢をも動かす力を持つがある。それは過去の"石"の争奪戦で証明済みだった。

例えば、7年半前に見つかった5つ目の石。それは、これまで10年以上続いた世界大戦の意味を覆し、戦争の目的が領地の奪い合いから、"石"の奪い合いへと変わった。

この時は多くの犠牲を払いつつも、争奪戦はエルカカの民が勝利する事となる。

そして2年半前に見つかった、6つ目の"石"。

この戦いの結末は、最終的に20年間続いた戦争の終結へと繋がった。

いずれの戦いも石の存在は最後まで公になることは無く、全ての戦火は侵略戦争の形で街を焼いた。

歴史の真実を知るのは、エルカカの民を初めとした、"石"に直接関わった僅かな者達だけだった。

戦争が終結を迎えてからまだ一年余り。

今回発見されたこの石が、再び戦争を引き起こす引き金になりうるのだ。

かつての争奪戦の激しさは、未だ記憶に新しい。

発見された石に対するエルカカの民達の眼差しは厳しく、また畏怖の念が込められていた。

◆

その夜、レイチェルは父親に改めて石を見せて貰った。

とはいえ、石は昼間見た、紅い歪な石の欠片ではなく、丸く黒い宝玉へ姿を変えていた。そのままでは石から放たれる魔力が強過ぎて、魔力に敏感な魔導士ならば離れていてもその異質な存在ら、この力を世界の発に気付いてしまうのだ。

その強過ぎる魔力を隠す為、魔力を遮断する黒オニキスへ石を閉じ込めるのだ。これはエルカカが昔から石を隠す為に使ってきた技法である。

「こうしてみると、とても世界中が狙ってる宝にはみえないね・・・」

「こら。宝なんて軽い言葉で呼ぶなよ」

何気ないレイチェルの呟きを父親はとがめた。

「無限の魔力増幅器、願いを叶える紅い石、永久機関、ブラッディ・ティアーズ、災いの血晶・・・」

「まあ色々言われてるけど、お前の言う通りだな。欲を持つ人間からしたら、これはただ金と力と権力を生み出す為のものでしかない」

レイチェルの感想に同調してしまう父親。

「世が世なら、この力を世界の発展に役立てる事が出来たんだろうが・・・」

残念ながら今の世の中では争いの種にしかない。勿体無い話だ。

我々が出来るのは、争いの種を封印し、秩序を取り戻す事だけだ」

レイチェルの父は、石を弄びながら自嘲気味に語った。

「これからエルカカはどうなるのかな・・・？」

レイチェルは少し心配した素振りで父親に問いかける。

「私達は今まで一つの事を目的に生きてきたのに、その目的が無くなってしまいうんだもの。どうすればいいか分からなくなる気がするの」

その言葉に少し呆けた顔で父親が問いかける。

「お前は石を探す事が人生の一番の目的なのか？」

「それは・・・エルカカの人なら皆そうじゃないの？」

はああ、と溜息をつく父親。

「レイチェル、お前は真面目過ぎる。エルカカの民である前に、お前は一人の女の子なんだ。

そんな古臭い考えをしているようじゃ老けるぞ」

一族の長が、一族の存在意義を全否定してしまった。レイチェルの目が思わず点になる。

レイチェルの父親は突飛な考えを持つ人間だ。型に囚われず、自分の意思を真っ直ぐに通す。その歪みの無い意思と、人を惹きつけるカリスマを認められ、若くしてエルカカの民を束ねる任を任されているが、彼は歴代の族長に比べると一族の使命を軽く見ているきらいがある。

「あ、お前、父さんの事を族長失格だ、とか思っただろう」

「少し思った」

笑いながら答えた。

「父さんだって、エルカカの族長である前に、お前の父親だ。一族の宿命なんかより、お前の幸せの方が大事だと思ってるんだぞ」

「やめてよ、どさくさに紛れてそういう事いうの」

照れるように、はにかむようにして、レイチェルは父から目を逸らす。

「お前も一族の定めに従わず、自分の夢を持って、と言ってるんだ。

何かないのか??」

「あたしの、夢？」

もちろんレイチェルにもやってみたい事は沢山あった。

でも、まずやりたい事は既に決まっていた。

「村を出る事かしら。私生まれてからずっとこの土地を離れた事がないもの。

外の世界を知りたいわ」

「ははっ、また無欲な夢だなっ」

「こんな狭い世界に居たんじゃ、どんな物が欲かのかも分からないわ」

「・・・そうかもな」

村では女は17歳になるまで旅立ち認められないのだ。古い風習だが、レイチェルにとってはそれが当たり前であった。

「そうか、レイチェルも来月で17歳なんだなあ」

「なによ、いきなり??」

「石を探す旅は必要無くなったが、父さんが旅から戻ったらいろんな国に連れて行ってやろうか？」

「嫌よ、父親同伴の旅なんて。私は自分の力で世界を見てまわりたいのっ」

「はは、もう子供じゃないんだもんなあ・・・」

どことなく寂しそうに頭を掻く。

「さて、と。明日も忙しくなるな。父さんはもう寝るぞ」

石を箱にしまい、膝を叩いて椅子から立ち上がる。

「おやすみ。あたしは食器洗ってから寝るね」

「ああ、おやすみ」

居間からレイチェルの父は立ち去り、レイチェルは台所に置いてある食器を片付け始める。

一人で食器を洗っていると、ぽっかりと心に穴が空いているのに気が付いた。

レイチェルは、石を探す旅に出る事を楽しみにしていたかもしれない。別に石を探すという目的が失われても、旅に出る事は出来るのだが、旅の目的を失った事で旅に出る意義が無くなってしまふような気がした。旅に出る必要が無くなった事で、ひょっとしたら、これまで間違って来たこの狭い村での生活が、これからはずっと続くかもしれないと思うと、途端に心細くなった。

17年間持ち続けた目標を見失い、これからの自分がどうなるか分からなくなったレイチェルは、自分でも良く分からない不安に囚われていた。

「なんだか・・・」

「ひゃっ！！」

突如背後から声を掛けられ、飛び上がるレイチェル。

「お、お父さん、何よ、まだいたの!？」

「居ちゃいけないのか？一家の主が我が家に」

まだ心臓がバクバクしている。思わずしゃがみこんでしまったレイチェル。

「いきなり声かけないでよね。で、何か用？」

レイチェルの父親は頬を掻きながら、

「いや、食器洗ってるお前の後姿が母さんそっくりに見えてな。思わず・・・」

「・・・はあ・・・」

どんな顔をすれば分からず、曖昧な反応しかできなかった。

「母さんも村のさだめには真剣に尽くしてきた。

父さんの手で、最後の石の封印ができれば、母さんも喜んでくれるかな・・・？」

レイチェルの父にしてはらしくもない、独り言のように、寂しげに呟いた。

「・・・きっと喜んでくれると思うけど、そのせいで父さんが怪我をしたりすと母さんは悲しむんじゃないかな？」

無理はしないでね」

「ははっ、母さんみたいな事を言うようになったんだな。ありがとう」

レイチェルの母親は、7年前の"石"をめぐる戦いで命を落としている。

村の中でも勇敢で、力を持った魔導士であったが、村に攻め入った軍隊の持つ銃器の前に何人もの仲間と共に敗れたのだ。

かつては力の象徴とされてきた魔導だったが、近年では銃火器等の近代兵器にその座を奪われようとしていた。村人の殆どが魔導の才能があるエルカカでも、近代兵器の出現した7年前の戦争では多大な犠牲がでてしまった。

このまま時代が流れれば、エルカカの持つ力は確実に時代遅れの長物となってしまう。だからできるだけ早く、エルカカの民が縛られるさだめを終わらせなくてはならないのだ。

戦いを、終わらせなくてはならないのだ。



その夜、レイチェルは夢を見た。

見ていたのは7年前の、村に軍隊が攻め込んだ日の夢。

ずっと昔に心の奥底に封印した光景を、久しぶりに見る事になってしまった。

全身にびっしょりと汗をかき、意識が覚醒する。

暗い部屋の中、半身を起こし頭を抱えて震えた。

抉られたように胸が痛んだ。

まだ悪夢の中にいるようだ。

そして別の不安が頭をよぎる。

レイチェルは予知夢を見る事があった。

少なくとも、何かの悪い予兆を夢で感じ取る事が多いのだ。

ならば今の悪夢は・・・？

ごおおお おおお おん・・・

村の外で、低く唸るような轟音が響いた。

夢を見た恐怖で体は動かなくなっていたので、視線だけを窓の外に向ける。

見えたのは白く輝く幾つもの照明弾の光と、夜空を焦がす火柱。

7年前の幼い日の夜に見た光景と、良く似ていた。

そしてレイチェルの悪夢が始まる。



「気付かれたか・・・」

黒いコートを着た男が夜空に舞う火の粉を見上げて呟いた。

男の周りには銃火器を手にした、黒いマント姿の男達。そしてその足元には、血を流し倒れている数人のエルカカの村人。

村の周りで見張りをしていた男達だった。今の火柱は、銃器を手にし襲ってきたマントの男達に、村の見張りが放った火炎の魔導だった。だが術が放たれる直前に男は銃で撃たれ、彼の術は暴走し見当違いの方向で炸裂したのだ。その爆炎によって、彼らの侵入はエルカカの住人達に気付かれてしまう事になる。

「まあいい、ここまで近づけば村は目の前だ」

コートの男は襟元のマイクで、部下達が個々に持つ通信機に指示を出した。

「これから突入を開始する。手筈は変更なし、だ。

村には戦える魔導士が50人以上いる筈だ、術を使わせるな。術の詠唱中に撃ち殺せ」

コートの男は懐から白い仮面を取り出し、顔に当てた。

白く、飾り気の無い、目の部分だけに細く切れ目の走るデスマスク。

「始めろ」

村の周囲を囲む120人の兵士の耳元へ戦闘開始の指示が送られる。

茂みから幾つもの人影が次々と姿を現した。



村では突然の爆発音にざわめき立っていた。何かと、皆が窓から顔を覗かせている。

村の入り口に10人程の男達が集まっていた。エルカカに残り村を守っている魔導士達だ。

「南の見張りの連中は！？」

「わからん。連絡も、戻ってくる気配もねえ」

男達は全く状況が掴めず、行動を起こせずにいた。

「最後の石を狙っていた連中が居るそうじゃないか。

まさか、そいつらに村の場所が・・・」

「おい！！」

男の一人が話を遮り、暗がりになった森の方を指差す。茂みと闇が蠢いていた。次の瞬間、闇の中から嵐のように銃弾が魔導師達に降り注いだ。

ボシュッ、シュボッ、

くぐもった破裂音と共に数発の照明弾が上げられ、村全体がまばゆい光に照らされる。



既に村には何十人も銃器を持った兵士達に侵入されていた。

兵士達は特徴の無い黒く身軽そうな軍服に身を包み、全員がライフルか機関銃を手にしていた。本来なら防弾服を身につけている彼らだが、魔導師達の前でそれは無意味だと判断したか、とにかく身軽に素早く相手を撃つための装備をしていた。彼らは統率された動きで無駄なく次々と村人達を"処理"して回る。

彼らの目的は、最後のヘヴン・ガレットと、それを守る部族の抹殺。

抵抗を見せる村人もいたが、魔導を放つ事も出来ず、近代兵器の前に次々と倒れていった。攻撃の為に僅かな時間とはいえ呪文を唱える必要のある魔導士にとって、多数の銃を相手にする事は非常に分の悪い戦いであった。

「なんだ、村人の殆どが魔導士って話だからビビってたが、こいつら何もできねーじゃねーか！！」

既に村の中心まで侵入者達は到達していた。思いの外簡単な任務に、一人の兵士が上機嫌に言った。

「おおい、向こうに女が逃げてったぞ！！」

「後続隊が追いつくまで、この場を確保する、雑魚は放って置け」

この部隊のリーダーらしき男が指示をするが、その兵士は興奮冷めやらぬといった様子でマシンガンの弾倉を詰め替え、叫ぶ。

「冗談！！上からの命令は村人の皆殺しだぜ！！俺は任務優先させてもらうさ！！」

「おい！」

静止を無視し、まるで狩りを楽しむかのように駆け出す兵士。しかし。

ぱしゅっ。

駆け出した兵士の体は、軽い音と共に上下に両断された。もつれるように崩れた兵士は、投げ付けられた人形のように地面へ転がった。

何が起こったか分からず、居合わせた兵士達は硬直する。

建物の影から蓬髪の青年が、細身の剣を構え、現れた。

「貴様がやったのかっ・・・！？」

兵士の一人が銃口を蓬髪の青年に向ける。同時に青年も剣を兵士達に向けて、一振りした。

ざふっ

剣を振る。ただそれだけの事で、間合いの遥か外に立つ兵士達の胸元が、深々と切り裂かれた。兵士達には何が起こったのか、分からない。

「嘘だろ・・・！こいつら、魔導を呪文の詠唱無しで使えるのか！？」

目の前の魔導師は術を唱えている様子も、その時間も無かった。兵士の眩きを相手にする事無く、再び青年が剣を振ると、兵士達は銃を構える事も出来ず、壊れたマネキンのように崩れて落ちた。

「貴様ら、生きて帰れると思うなよ・・・」

青年の放つ憎悪の感情に、侵入者達は圧倒されていた。



村の北側、レイチェルの家の裏手の森に、逃げてきた村人達が集まっていた。

「これで全員、か・・・」

レイチェルの父が逃げ延びた人数を確認し、愕然とする。

「違う場所へ逃げ延びた者もいるとは思いますが・・・」

「戦えるのは、何人だ？」

「私と族長を含め、ここにいるのは6人、今、村の中でレインバークやレグサスが足止めをしています」

「ヴィッツはどうした！？」

「・・・死にました」

「くそっ！！」

木立に拳を叩き付けた。

最初の爆発騒ぎから、時間にしてまだ半時経っていない。この短時間の間に村の殆どが制圧されていた。

(やはり、近代兵器の前ではエルカカの力は無力なのか。

いや、認めない。

我々の250年間の戦いを、こんなに簡単に終わらせてたまるか・・・ッ！)

レイチェルの父は、消え入りそうな戦意を奮い立たせ、顔を上げた。

彼は呆然と村を見つめるレイチェルに向き直る。

「・・・村の外に続く地下道は知っているな。

お前とディアベルは戦えない村人を連れて、そこから村を出るんだ。

残りの戦える男は、村に戻りレインバークたちと合流し、敵を叩く」

村には、数十年前に作られた長い地下道があった。周囲を深い山々に囲まれたエルカカだが、その地下道を数時間も歩けば、比較的人通りのある街道近くに出る事ができるのだ。無論、街道側の出口には物理的なカムフラージュと魔導による結界が張られている。

「私も戦えるわ！！」

レイチェルが反論する。だがその声は微かに震えていて、無理をしているのは明らかだった。

「お前は皆と一緒に逃げるんだ、私達もすぐに追いつく」

「でも、私だって魔導は使える！ 居ないよりは・・・」

「居ない方がいい、お前は足手まといだ」

「どうしてよ！？」

「お前は人を殺した事が無いからだ」

レイチェルがハッと息を呑む。

「そんな奴がいても足手まといになるだけなんだ」

「・・・・・・・・」

それだけを言って、背を向けてしまうレイチェルの父。レイチェルの方は言葉が出ない。いざ人を殺すとなった時、自分にそれが出来るとは思えなかったからだ。

「じゃあな。すぐに戻るから」

レイチェルの父は一度だけ振り返りいつもの笑顔を見せると、他の魔導士達と共に村へと戻っていった。

その後ろ姿を見送るレイチェル。

彼女は、このままではもう二度と父に会えないのではないかと、という不安を感じていた。だが、今のレイチェルには父の後を追うことは出来ず、父に言われた通り村から遠ざかる事しかできなかった。



村の中心では戦いに変化が起きていた。

一方的に攻め進んでいた侵入者達が、たった5人の魔導士達に圧倒されていたのだ。

村の中心で軍隊と戦っているのは、エルカカの民の中でも特に手練の魔導士達であった。

「うわぁっ！」

短い悲鳴と共に銃を乱射する兵士。銃弾は剣を持つ蓬髪の青年へと向かうが、銃弾は青年に届く前に明後日の方向へと弾き飛ばされる。

小さな風斬り音を上げ蓬髪の青年が剣を振ると、その前にいた兵士達が一斉に見えない刃に断ち切られ崩れ去った。

耳障りな異音と共に、初老の魔導師の手から光の帯が伸びる。それは物陰に身を隠す兵士の背を追う様に弧を描くと、彼等を次々と打ち倒してゆく。しかしそれほど俊敏な動きを持たない光の帯は幾つかのを外し、兵士が盾にしていた建物を盛大に破壊した。

「レインバークさん、あんまり村を壊さないでくださいよ！！」

「こんな時に何をいっとるか！！」

それよりレグサス、結界と風の剣はまだ持つのか！？」

「ここに居る雑魚どもを片付けるくらいの力は余ってますよッ！」

言いながら敵の只中へ突進をかける、レグサスと呼ばれた蓬髪の青年。確かに銃は脅威だったが、それを扱う兵士達に特筆するべき力は無かった。

「エルハノイ、カルマはレグサスの援護を！！結界が持たなくなったらすぐに引け！！」

アレンはいつでも結界と治療の術が使えるようにしておけ！！」

初老の男、レインバークの号令と共に、斧を持った男と、鎖鎌を持った男が弾幕の薄くなった村の広場へ飛び出す。

その姿を認め、兵士達は2人に向かい一斉に射撃を始めるが、弾丸は魔導師達に届く前に弾速

を失い、力なく地面へと散らばる。そして間合いを詰められた兵士達は次々と倒されていった。

エルカカの民の強さの真骨頂は、魔導と武術の両道であった。彼らは武器に持続性のある特殊な術をかけ、呪文の詠唱無しに、武器を介して魔道を発動させる術を得意としていた。レグサスの、かまいたちを放つ剣のように。

村の中央広場には、累々と兵士達の死体が折り重なっていった。

レグサスが背後の兵士を切り伏せると、いつの間にか周囲に敵の兵士が一人もいない事気づいた。

「なんだ、逃げだしたのか？」

流石に肩で息をしながら、レグサスは広場の中央に戻ってくる。大斧を持った男、エルハノイと、鎖鎌を持った男、カルマと背を合わせ、辺りの様子を伺った。

「何人連れて来たかは知らないが、ここにいるだけでも30人以上は殺ったな・・・」

「後味悪い戦いですね・・・」

レグサスは言葉の割に何も感情の籠っていない軽口を叩くと、視界の端で何かが動いた。反射的に視線を巡らす、何も変化は無い。

「上！！」

彼らを遠巻きに見ていたレインバークが鋭く声を上げた。3人は上を見上げる事もせず、反射的にその場を飛びのいた。

がががっ！

レグザスの腕と足に何かが喰い込む。傷の確認さえも後に回し、襲い来た敵を確認する。



異様な風体だった。

人数は5人。全員が赤黒いマントを着込み、フードを被った顔は白い仮面で覆われていた。仮面のデザインは個々によって微妙に違ったが、それから受ける不気味な印象は全て同じだった。

まるで恐ろしい夢や童話に出てくる、死神のような姿。

レグサスは腕の傷を確認する。細かい金属の欠片が幾つも喰い込んでいる。どうやら防ぎきれなかった銃弾が砕け、結界を貫通したようだ。

良く見ると、黒マント達の手には、ライフル型の見慣れない銃が握られていた。村を蹂躪していた兵隊達の銃とは違う、精練されたデザインの銃だ。

「大丈夫か、レグサス」

「ええ。気をつけてください、奴らの銃、結界では防ぎ切れないかもしれませんよ・・・」

「戦車の装甲よりも厚いお前の結界を抜けるってえのか・・・」

レグサスたちを囲んだ5人の黒マントが、じわり、とその輪を狭めた。レグサスは剣を、円を描くように一閃させた。かまいたちで、周りの黒マント達を斬り飛ばすつもりだ。

しかし、放たれたかまいたちは、黒マントたちの体を大きくのけぞらしたただけだった。

「な・・・っ!？」

思わず絶句するレグサス。

間髪いれずに、エルハノイは大斧で黒マント達を薙ぎ払おうとするも、常人離れした動きで黒マントは身をかかわす。

ざりりりんっ!

身をかまし空中に飛んだ黒マントに、突然伸びてきた鎖がまるで意思のある蛇のように巻き付いた。カルマの持つ魔導で制御した鎖鎌だ。

「焼け死ねっ!」

バシバシッ!!!

鎖と黒マントから閃光と火花が散る。鎖を伝い、雷撃の術をかけたのだ。そのまま鎖をうねらせ、黒マントを地面に叩き付けた。

思わずその黒マントを見つめる3人。レインバークも遠目で事の成り行きを見守る。

しかし、普通の人間なら間違いなく死んでいる筈の攻撃に耐え、黒マントは薄い煙を上げながら、ゆっくりと立ち上がった。

「なんだ、こいつら・・・」

思わず息を呑むエルカカの魔導師達。これは、普通の相手ではない。

「この服は特別製でな」

突然、黒マントの一人が仮面を外して話し始めた。

僅かに驚くレグサス。黒マント達があまりにも異様な雰囲気を持っていたため、人間を相手にして戦っているという実感が薄かったのだ。しかしフードの中から覗いた顔は、金髪を長めに伸ばした若い男だった。森の入り口で通信機を使い、兵士に指示を出していたコートの男だった。今は他のマント姿達と同じ様に、コートの上に赤黒いマントを羽織っていた。

「普通の銃弾じゃ貫通はおろか、衝撃も殆ど吸収する。物理的な攻撃じゃなく、魔術にも耐性がある、特別あつらえの戦闘服さ」

調子良く話す男に構わず、レグサスは腰に差したナイフを男の額に向けて投げつけた。

「っと」

軽いリアクションと共に、男の手が霞む。次に男の手を確認した時は、レグサスの投げつけたナイフが握られていた。

「・・・！」

レグサスは男の動体視力と人間離れした反射神経に驚愕する。

「もちろん、このマントが与えられる人間も、特別製という事さ」

思わず動きが止まってしまったレグサスに、男はそのナイフを投げ返した。

どすっ

胸に自分の投げつけたナイフを受け、レグサスが倒れる。

「さきまっ！！」

エルハノイが斧を構え、黒マントたちに踊りかかる。

大斧の一撃は黒マントの一人をまともに捉え、黒マントは自動車に撥ねられたかのような勢いで民家の塀に激突した。

だが斧の刃は全く相手を傷つける事はなく、更にその衝撃も大した事が無いとでも言うように、塀に叩きつけられた黒マントは立ち上がった。

びゅん、

後方からレインバークの放った術がエルハノイの背を飛び越え、放物線を描くように黒マントに突き刺さる。途端に一際大きな連続爆発が起こるが、煙が収まった後には、えぐれた地面に何事も無かったかのように立つ、黒マント達の姿。

「・・・・・・・・」

絶句する、エルカカの魔導士達。剣も魔導も歯が立たない。次の手が思い浮かばず、攻撃の手が止まってしまった。

金髪の黒マントは再びマスクを被り、やれやれ、といった調子で指示をだした。

「もういい、やれ」

その声と共に、黒マントたちは、一斉に銃口をエルカカの魔導士達に向けた。

慌てて結界を張り直し弾幕を受け止める。だが、黒マント達の放つ銃弾は、結界に深々と食い込み、徐々に結界へ侵食を始めた。

「駄目だ・・・持たない・・・っ！！」

黒マント達と向かい合っていた、エルハノイとカルマは銃弾の雨に結界を破られ、倒れた。

「ぐ・・・」

少し離れて援護をしていたレインバークと、共に援護をしていた魔導士にも、黒マントたちの銃口が向けられた。

死を覚悟するレインバーク。

どひゅん

突然、何かが辺りの空気を低く振るわせた。金髪の黒マントが音のした背後を振り返ると、そこには腰から上が丸ごと無くなった部下の下半身が立っていた。

「・・・ッ!？」

もちろん、どんな攻撃にも耐える赤黒いマントごと、部下の体は無くなっていた。暫く立っていた下半身も、バランスを崩しゆっくりと地面に倒れた。

金髪の男は倒れた仲間の断面を凝視する。断ち切られた、特別性の戦闘服の断面を、凝視する。彼は部下の死ではなく、戦闘服が断ち切られていた事に驚愕していた。

残りの4人の黒マント達の周りに、じわり、と幾つもの黒い霞が現れた。

「ッ! 散れ!!」

本能的に危機を感じ取り、その場を離れる黒マントたち。

ずどっどっ、どひゅっ!

黒マント達の周りに現れた黒い霞は、唐突にその濃度と質量を上げ一抱えほどの黒い球体へと姿を変えた。そして、その球体は一瞬で収束し、消えて無くなる。

どざざっ。

黒マントの一人がまた倒れる。彼はマントの一部と足の膝から先を失っていた。

まるで、黒い球体にえぐり取られたかのように、彼の体は消失していた。

すぐ横手の民家から、魔導士達が黒マントに飛びかかった。レイチェルの父と一緒に戦場へ戻って来たエルカカの魔導士達だ。

黒マント達は得体の知れない力に恐れ、シャノン達から距離を取った。

彼の前に姿を現したレイチェルの父は、その眼差しに静かな怒りをたたえ、黒マント達を見据える。

村のあちこちで響いていた銃声はすっかり止んでしまった。

もう村の中で生き残っているのは、侵入者達と戦っているレイチェルの父達だけなのであろう。

戦いの場は静寂が支配していた。黒マント達が着ていたコートとマントは銃弾も通さず、魔導にも耐性のある、人間一人を装甲車並の戦力に仕上げる戦闘服だった。それがレイチェルの父親が放った得体の知れない術に、いとも容易く断ち切られてしまったのだ。その出来事に黒マント達は動揺し、攻撃を仕掛けられずにいた。

「どんな強靱な戦闘服だろうが、空間ごとえぐり取られれば意味は無いだろう」

両手に黒い霞をまとったレイチェルの父が、黒マントたちの前に立ちはだかる。

「シャノン……！」

生き残っていたレインバークが、彼の名を呼んだ。年長者であり彼の親友であるレインバークだけが、彼の事を"族長"ではなく名で呼ぶのだった。その声に、金髪の黒マントが反応する。

「そうか、貴様がシャノン=ブラズハートか。この村の主、伝説の魔導士の子孫、だったな？」

一応、部隊を指揮する者として自己紹介はしておこう。ルゴワールという組織は知っているか？

私はそこの第六研究所・実験部隊マスカレイドの隊長ツヴァイだ。短い間だが、宜しく頼む。

因みにお前らが殆ど片付けてくれた軍服の連中は、頭数を揃える為に他所の隊から集めた雑魚どもだ。一緒にはしないでくれよ」

金髪の黒マント、ツヴァイはふざけた挨拶とともに、こうべを垂れた。シャノンが苦い表情を浮かべる。

「国の軍じゃなく組織の人間か……手口に品がないと思ってたところだ」

ルゴワールとは世界で最も名前の通った犯罪組織だ。その影響力は、幾つかの国の実権を影で握っていると噂される程。先の戦争中期に生まれた若い組織で、武器の製造、輸出、そして戦火を拡大させる裏工作により、さらなる武器の需要を生み出し尋常ではない速さで巨大化していった組織だ。幾つもの犯罪組織が傘下に入っており、名実共に裏社会の頂点に立つ組織であると言える。

ふとツヴァイが気づくと、自分のコートの裾もスッパリと切れており、特殊加工した繊維と、その間に仕込んだ魔導金属が見事な断面を見せていた。

「貴様の魔導、聞いた事があるぞ……。

貴様の一族だけが受け継ぐ、空間操作の術……。魔導式の起動圏内にどんな硬度を持つ物があっても、空間ごとその対象を抉り取る事が出来る」

これが大魔導士エレクトラの血を引く者が使える、秘術の一つだった。250年前、エレクトラはこの術をヘヴン・ガレットの力で増幅し、魔物達を異空間へ閉じ込めたとされている。

シャノンが倒れたレグサス達に目をやる。



「貴様ら・・・エルカカに来た目的は何だ？」

声は怒りに震えていた。ツヴァイは肩をすくめ、答える。

「そんな事言う義理は無いだろ。」

それとも、言うまでも無いって言った方が近いか？」

シャンツ。

鋭い音を立てて、ツヴァイのマントから、細身の刃が飛び出した。仕込み式のサーベルのようだった。

「しかし、貴様の術は少し厄介だな。」

お前ら、下がってろ。コイツは俺がやる」

ツヴァイが一步、シャノンの前に歩み出た。後ろに控えた黒マント達は、周りを囲む数人の魔導師達を気にしながら、後ろへ下がった。

ツヴァイは、仮面とフードを外し、抜いたサーベルを上段に構えた。

警戒するエルカカの魔導師達。シャノンの両手にまとわり付いた黒い霞がその濃さを増した。

次の瞬間、僅かな動作でツヴァイが駆け出した。その動きを見ながら、シャノンは両手の空間転移魔導をツヴァイの進路上に発動させた。

どどっひゅん！

しかし、黒い霧が現れる寸前でツヴァイは身を切り返していた。まるで術の発動する場所が分っていたかのように、黒い霞の間を縫うように駆けた。

それはほんの数秒の出来事。投げ付けられたナイフを受け止めるような、人間離れした反射神経と運動能力を持つが故に出来る事だった。

「なっ!？」

驚きの声を上げるシャノン。既にツヴァイは目の前に居た。次の術を発動させる暇は無い。シャノンは腰の剣を抜いてツヴァイに向けて振るう。しかしツヴァイはシャノンの体を中心に回り込むようにして彼の背へと回り込む。そしてツヴァイは自分の脇下から、シャノンの背へとサーベルを突き刺した

「が・・・っ・・・!!」

「どんな凶悪な魔導でも、当たらなかつたら意味は無いよな？」

自分の背とサーベルをシャノンへ押し付けながら、彼に言われた言葉を真似るツヴァイ。引き抜いたサーベルを次は肩口に突き立て、シャノンの体を地面に繋ぎ止めた。

そしてサーベルから手を離す。

「こいつはこのまま生かしておけ。残党狩りを始めるぞ」

ツヴァイはデスマスクとフードを被り直し、後ろへ控える部下に言った。



家々が燃え村が紅く染まり始めた。

生き残っていた侵入者達は、エルカカにある書物、魔導的に価値のあるものばかりを運び出し

、その作業を終えた家に火を放っていた。

村の中央の広場。エルカカの魔導士達との戦いが終わり、そこには数人の兵士と、ツヴァイの姿。そして血を流して横たわる、エルカカの魔導士達。

ツヴァイの指示通り、シャノンはまだ生かされていた。

「"石"だ。村に無い事は分かっている。誰が持って逃げたんだ??」

傷口を押さえながら、静かに呼吸をするシャノン。重傷だった。自分でも長くは持たないと理解出来る程に。シャノンは懐から、黒い宝玉の納まった首飾り出した。思わず驚きの表情を浮かべるツヴァイ。

「はっ、この場にまで持ってきてくれてたとは、いたみ入る」

笑いながら言う。

「とりあえず、本物かどうか、確かめさせて貰おうか」

石に伸ばされたツヴァイの手をシャノンは振り払った。

「本物かどうかは、・・・俺が見せてやるよ」

「何？」

言葉の意図が読めないツヴァイ。

「残念だが、エルカカの村は、これで終わりのようだ・・・」

だが、ここで我々が守り通してきた石を、お前達に渡す訳にはいかない」

「言うのは自由だが、お前にその"石"は守り切る事はできない」

「そうかな？」

未だに消えない余裕の表情に、ツヴァイの胸に嫌な予感がよぎる。

「俺の空間転移の術を、この石で増幅させれば、この村ごと、お前たちを消すことができるんだぜ」

ツヴァイの表情が強張る。

「たいした覚悟だな。俺達だけでなく仲間まで巻き込んで心中するか？」

「俺は死なない。俺以外の全てがこの村から消えるんだ。そうすれば、少なくともこの場でお前達に石を渡す事も無い・・・」

それは生き残っている仲間達をも道連れにする方法だった。しかし、レイチェル達は今頃村の外へ通じる地下道に居る筈だ。シャノンは、彼女達に未来を託そうとしていた。

「・・・ハッターだ」

ツヴァイはシャノンの言葉を鼻で笑う。

「いい案だと思いますよ・・・おれは、賛成です」

声を開けだのは辛うじて意識を保っていたレグサスだった。

「そのかわり、族長は生き延びて、絶対石を封印してくださいよっ・・・」

「へまったら許しませんからね・・・」

「頼んだぞ・・・」

まだ息のある他の魔導士からも声が上がった。

「ああ。まかしておけ」

シャノンの目に、一層強い光が宿る。

ズヒュウヴヴッ！！

シャノンが握っていたヘヴンガレットに、急速に黒い霧が収束し始めた。ここに来てようやくツヴァイは彼が本気だという事を理解する。

「ッ・・・っさせるか！！！」

サーベルを振り上げ、シャノンの首を跳ねようとする。

「わあああああああああつ！！！」

突然、何処からか女の叫び声が上がった。悲鳴ではない。己を鼓舞するかのような力強い声だった。驚いたツヴァイは思わず声のした方を振り向くと、

どがああっ！！

彼の側頭部に衝撃が走り、そのまま突き飛ばされるように地面へと倒れ込んだ。

驚愕の表情を浮かべるツヴァイと、そしてエルカカの魔導師達。

そこに立っていたのは、ハンマーロッドを握った金髪の少女。レイチェルだった。

兵士達は反射的に銃口をレイチェルに向ける。しかし彼女はそれに構う事無く、組み上げた魔導式をハンマーロッドの先端に宿し、それを地面へと打ち付けた。

ボガァアッ！

ハンマーロッドで叩いた地面が盛大にめくれ上がり、その土砂が兵士達の一斉射撃を防いだ。津波のような土砂はツヴァイ達へと降り注ぎ、その姿を土砂の中に隠してしまった。

不意を突いたとはいえ見事な手並みだった。しかし今は関心している場合ではない。シャノンは傷を抑えながら立ち上がる。

「レイチェル！！お前、どうしてここに・・・！！」

シャノンの胸には心配や動揺といった感情が複雑に織り交ざる。そんな彼を、娘のレイチェルは目に涙を滲ませながらも決然として言った。

「こいつらと一緒に村のみんなも道連れにするなんて、そんなの絶対にダメよ！！！」

みんな助けて、全員でここから逃げよう！！」

彼女は一人で村に戻り、倒れたシャノンとツヴァイの話を途中から聞いていたのだ。足は竦み、恐怖に震え身を隠していたが、父の窮地に恐怖をねじ伏せ彼女は戦場に飛び出してきたのだ。

「ははっ、これは好都合だ。その女、お前の娘か何かか？」

レイチェルの巻き上げた土砂を押し分け、ツヴァイが立ち上がった。その頭からは血が流れていた。

「族長・・・！」

レグサスがシャノンへ術の発動を促す。

「しかし・・・っ」

一度は覚悟を決めたシャノンだが、術の発動に躊躇していた。

今ヘヴンガレットで増幅した空間転移術を発動させれば、レイチェルまで巻き込んでしまうか

らだ。

「ふはははッ、流石に躊躇うよなあ・・・

一族の勤めを果たす為に、娘の命まで犠牲にするのはよ・・・」

その通りだった。シャノンにとって、レイチェルの命は一族の使命よりも大切なものだ。ツヴァイが首を鳴らしながら呟く。

「それにしても、さっきの一撃は効いたぜ。まだ足に来てやがる」

レイチェルのハンマーロッドは、彼の側頭部を掠めていた。衝撃を吸収するフードもデスマスクも被っていなかった為、まともに当たっていたら死んでいたかもしれない。

「これは・・・ただじゃすまないぜ」

頬を伝う血を舐めて、土砂に埋まりかけていたサーベルを拾い上げた。

レイチェルは呪文を唱えながらハンマーロッドを大きく振りかぶり、その勢いに体を乗せツヴァイへ飛びかかった。

がんっ。

ツヴァイは片手でレイチェルのハンマーロッドを受け止めた。素手ではない。マントと同じ素材で作られたグローブだ。それだけでハンマーロッドの衝撃を殆どを吸収してしまう。そのままハンマーを掴んで彼女の体を引き込むと、いとも簡単に両腕を捻り上げ、呪文も唱えられないように後ろから口を塞ぐ。

「レイチェル！！」

「動くなよ、族長さん。分かるだろ？」

シャノンは絶望的な表情でその場に立ち尽くす。

「大人しく石を渡すんだ。

おかしな真似をすれば、この小娘の喉を掻き切る」

「・・・・・・・・」

動く事の出来ないシャノン。レグサス達も、事の成り行きを見守る事しか出来なかった。

「どうした、早く」

言いかけたツヴァイの言葉が途切れる。彼は視界の端で、自分の懐に黒い霞がまとわり付いているのを見た。

空間転移の術。しかし、気付くのが遅かった。

どひゅんっ！

低く、鈍い音が周りの空気をひずませた。

「うぐおおああああああああっ！！！」

レイチェルを捕らえていたツヴァイは身を仰け反らせ、絶叫する。

ツヴァイの腕と、脇腹が消失していた。腕は肘の部分の殆どが抉り取られ、腕の先は二の腕と皮一枚で繋がっていた。脇腹からは、自分の臓物がこぼれている。それを見たツヴァイは片腕で腹を抱え、血を吐きながら悶え苦しむ。

空間転移の術を発動させたのはレイチェル本人だった。彼女もまた伝説の魔導師の血を引き、

シャノン程ではないにしろ呪文詠唱無しで空間転移の術を制御する事が出来たのだ。

「ぎ、貴様、かああ` ああああああっ！！！」

ツヴァイは顔に死相と憎悪を貼り付け、地を這いながらレイチェルを見上げる。

「ひっ！ あああ・・・！」

その形相に術を使ったレイチェル当人が怯え、足をもつれさせて転んだ。

自分の手で相手に致命傷を与えた事。その人間が無残な姿を晒しながら自分に憎悪を向けてくる事。レイチェルにとって、それはどちらも初めての事だった。

「殺す！！」

ツヴァイは血と臓物を滴らせながら立ち上がり、サーベルをレイチェルに向けて振り下ろす。レイチェルは恐怖と罪悪感に囚われ、動く事ができなかった。

ズボシュッ！

しかし低い音と共にツヴァイの体が震え、そのまま押されるように地面へ倒れた。

まだ意識を残していたレグサスが、黒マントの落としたライフルでツヴァイを背中から撃ったのだ。やはりこの銃は特別製なのか、着弾の衝撃はマントを突き抜けてツヴァイの意識を刈り取った。

レグサスもまたそこで力尽き、ごとりと、とライフルを取り落とし地に伏した。

暫くは時間が止まったかのように静かだった。

やがて早鐘のような心音と、自分の荒い息、ガチガチと鳴る奥歯の音が聞こえてきた。実際に周囲から音が失われた訳ではなく、目の前の出来事が処理出来ずこれ以上の情報の入力を拒んでいた視覚や聴覚が機能を取り戻し始めたのだ。

「レイチェル」

肩を掴まれ驚いて振り向くと、そこには血を流した父の姿があった。

「そ・・・そうだ、逃げよ・・・お父さん、早く・・・！」

しかしシャノンは静かに首を振る。そして怯えきったレイチェルを落ち着かせるよう、優しい声で話し出した。

「父さんは、一緒に行けそうにない」

笑みさえ浮かべてそう言った。

「レイチェル、"石"を封印する場所は、覚えているな？」

首を縦に振るレイチェル。随分昔、レイチェルの家系の間人間しか知ってはならないという、ヘヴン・ガレットの封印場所を教えて貰ったことがある。シャノンは石をレイチェルに握らせた。

「"石"の封印は、お前がするんだ・・・すまん、役立たずな父さんで・・・」

レイチェルの目から涙が溢れる。シャノンの傷は、誰が見ても重傷だった。たとえ今から助けが来たとしても、彼の助かる見込みは無いだろう。それはレイチェルも悟っていたが、認めたくなかった。

「無理よ！！ わたし、まだ村の外に出た事すら無いのに・・・お父さんも一緒に・・・」

「お前なら大丈夫だ。自覚は無いかもしれないが、お前はエルカカの魔導士としては、もう立派

に一人前だ」

レイチェルの頭を撫で、涙で濡れた頬に手を添える。

「だが、無理に一族の宿命を背負う事はない。嫌だったら"石"は海に捨てて、お前は村の外に自分の居場所を見つければいい。お前の好きなようにやればいいんだ」

その言葉に、レイチェルは父の手を握り、涙を拭い、決心した。レイチェルは激しく首を横に振る。

「私が、絶対石を封印するから！！お父さんやお母さんは、その為に戦ってきたんだから、私がここで終わりになんか絶対にしないっ！！

だからっ……」

その先は言葉にならなかった。たとえ願ったとしても、それはきっと叶わない。父の手を握り締め、再び泣いた。いくら拭いても、涙は止まりそうに無かった。

ぽん、とレイチェルは頭を叩かれた。

「無理はすんなよっ」

トン、と、レイチェルは軽く体押された。

「？……お父さん？」

低い音を立て、シャノンの両手に、黒い霞がまとわりついた。

「これからお前を、村の外へ続く洞窟の入り口まで送る。とにかく、先に避難した村人達と一緒に近くの街まで逃げるんだ」

「っ！おとうさ……」

「じゃあな」

ドヒュン！！

レイチェルの全身が黒い霞に包まれ、消えた。空間転移の術は対象の全身を包むように発動させ、移転先の場所までイメージして使えば、瞬間移動といった使い方も出来る。

どさり、と腰を下ろすシャノン。無理に作り笑顔をしていたが、意識を保つのも限界に近づいていた。

遠くから増援の兵士達が近づいて来るのが見えた。その中には例の黒マントも居た。シャノンは溜息をつく足元に転がっていた拳銃を拾い上げ、自らのこめかみに当てる。

「……エレクトラよ、願わくば、私の娘に、ご加護を。

……レイチェル……」



レイチェルが目を開くと、そこは薄暗い森の中だった。目の前には、小さく口をあけた村の外へ続く洞窟。後ろには紅く燃え上がる村が見えた。思わず村の方へ足を踏み出してしまったが、胸元の石を握り締めると、思いを振り切るかのように身をひるがえし洞窟の中へと降りていった。

ハンマーロッドの先端に付いた宝玉に光の術をかけ、暗い洞窟を照らした。宝玉と同じ、薄い紫の光が洞窟の壁を照らす。先に洞窟へ入った村人達はだいぶ先に行ってしまったのだろう。レイチェルは洞窟の入り口で、皆の制止を振り切り、単身村に戻ったのだった。皆に心配を掛けてしまっただろうか。

「私、村に戻らない方がよかったの・・・かな・・・？」

あのままシャノンが敵も味方も巻き込んで空間転移の術を使っていたら、少なくともシャノンは生き延びていたのかもしれないのだ。考え方によっては、自分のせいで父は・・・。

答えの出ない悩みを抱え一人洞窟を歩いていると、そこには再びレイチェルの認めたくない現実が現れた。

レイチェルより先に村を脱出した村人達。全員が銃で体を撃たれ、冷たい血の海に横たわっていたのだ。

「うそ・・・でしょ・・・？」

ガラン、と、明かりの灯ったロッドを取り落とした。もうレイチェルの顔には表情すら浮かばない。見知った村人に駆け寄り、体をゆする。

「ダグラスさん、ねえ、何があったの・・・ディアベル、ライアンさん、ミゼットおばさんっ！！！」

問い掛けの声は叫び声に変わる。震える両手で頭を抱え、レイチェルは声にならない叫びを上げ続ける。気が狂いそうだった。

突然、強い光を正面から浴びせられた。

「誰だ！？」

「誰か居るのか！！」

幾つかの投光機の光と共に、複数の足音が洞窟の入り口から近づいてきた。確かめるまでも無い。村を襲った侵略者達である。

「何だ。まだ村人が残っていたのか」

兵士の人数は5、6人。屈み込んだレイチェルの前で立ち止まる。

「この女、どうします？」

「殺すに決まってるだろう。上からの命令は皆殺しだ」

隊長格の兵士は自ら手にしていた拳銃を、レイチェルの頭へ突き付ける。

ボガン！！

レイチェルの右手に、火花と共に巨大な火炎球が生まれた。

「！！こいつっ魔導士・・・っ」

「うあああああああああっ！！」

兵士達は慌てて銃口をレイチェルに向けるも狙いをつける暇ではなかった。彼女が叫びと共に解き放った術は兵士達の足元に炸裂し、彼等は爆炎と熱風に焼かれ吹き飛ばされた。

爆発は洞窟を揺らし、狭い空間で渦巻く爆炎は術を解き放ったレイチェル自身にも襲い掛かる。

ず・・・ずず・・・ずうん・・・

地響きが収まり煤で汚れた顔を上げると、兵士達が居た場所の天上は崩れ洞窟の入り口を塞いでいた。彼等は術が炸裂した瞬間に苦しむ間もなく焼け死んだだろう。力が抜け、ぺたり、とその場に腰を落とす。

人を殺した。だがその実感は薄い。罪悪感も無い。

当然の事だとさえ思った。

レイチェルは涙を拭くと横たわる村人達に黙禱を捧げ、何もしてやれない事を心の中で詫びた。そして、必ず自分が一族の宿命をまっとうすると、"石"を握り締めて誓った。

「痛っ・・・！？」

歩き出そうとすると、腹部に鈍い痛みが走る。痛みの元を見ると、その周りの服が真っ赤な血で染まっていた。

火炎の術が炸裂する直前、一発だけ兵士の放った銃弾が彼女の脇腹を貫通していたのだ。

「あ・・・」

最初は全く痛くなかったのに、傷を確認した途端、耐え難い苦痛に見舞われた。冷たい汗がどっと滲んだ。それでもレイチェルは傷口を押さえつけ、顔を上げる。

「石を・・・封印しなくちゃ・・・」



それから先のレイチェルの記憶は曖昧だった。

どれだけ歩いたか定かでは無いが、気付くと洞窟の外に立っていた。時刻は早朝だろうか。薄暗く、霧が出ている。辺りは草原に覆われ、遠くに街道のような細い舗装道路が見えた。

「誰か・・・」

身も心もボロボロだった。レイチェルは少し歩いた所で草の上に倒れ込んでしまう。猛烈な眠気に襲われる。これは疲れから来る睡魔か、それとも死か。

レイチェルは胸元のヘヴンガレットを握り締め、願う。

(ここで、死ぬわけには、いかないの・・・お願い、誰か・・・助けて・・・)

レイチェルの意識は、ここで闇に落ちた。

ただ、意識を失う直前に誰かが近づいて来たような気がした。

石はレイチェルの願いを叶えたのだ。





## 第11話 動き始める今と過去

---

エアニスはずっかり冷めてしまった紅茶を飲み干し、小さく息をつく。  
テーブルを囲む4人は皆、エアニスと同じような表情をしている。  
一通りの事情を話し終えるとレイチェルは言葉を切り、部屋には沈黙が落ちていた。  
誰も、何も言おうとはしない。  
何を言えばいいのか、わからない。  
既に窓から差し込む日は傾き始め、部屋を茜色にそめていた。

「私が倒れてたレイチェルを偶然見つけて、馬車を捕まえて街まで運んだの。

・・・丁度その街には腕のいい魔法医がいたから、レイチェルの銃創もすぐに治せたわ」  
言葉の途切れたレイチェルに代わり、その後のいきさつをチャイムが代わりに説明する。

「それで今の・・・レイチェルの事情を聞いてね。

放ってはおけなかったから、旅の護衛と道案内を引き受けてるの」

簡単に言ってしまったが、それはチャイムにとってもそれなりに覚悟を要した決断だった。自分が手を貸したくらいで何とかなる問題だとは思わなかったが、それでも事情を聞いてしまった以上、放っておく事は出来なかった。因みに、その事情もチャイムが無理矢理レイチェルから聞き出したようなものだった。レイチェルは他人に事情を話し、自分のいざこざに巻き込んでしまうのを恐れていたため、彼女から事情を聞き出すのには苦勞をした。

「昨日の黒服達は、ルゴワールの人間なんですか？」

レイチェルの話が始まってからずっと黙っていたトキが初めて口を開いた。

「ううん、確かあのバルザックって呼ばれてた赤毛は、"エイザム"って組織を名乗ってたわ」

「"エイザム"、ですか。

最近勢力を伸ばしてきて、ルゴワールに取り入ったばかりの組織でしたね・・・。

ルゴワールからの覚えが良くなるように、手柄を上げに来たといった所ですか・・・」

「ギルドのバルガスもそんな事を言ってたぞ。

最近、田舎の本拠地から大挙してこの辺りにやって来たらしい」

エアニスも自分の聞いた事を話す。すらすらとそんな情報が出てくる二人の会話に、チャイムは呆気に取られる。

「・・・と、とにかく、その"エイザム"って連中以外にも、色んな組織がこの"石"を狙って動いてるみたいなの。

ルゴワールは幾つもの犯罪組織と繋がりがあって事も知ってるし、国にも影響力を持った組織だと聞いたわ。だから、軍や役人に話す事もできなくて・・・私たちは、極力見つからないように旅を続けてきたんだけど、最近は頻繁に刺客に襲われる様になってて・・・その、困ってるの・・・」

まわりくどい言い方をするチャイム。気丈な彼女からは、助けて欲しいという言葉は出そうに無い。

エアニスは溜息をつきながら椅子にもたれかかり、額に手を当て眉間にしわを寄せる。

「話はこれで全部か？レイチェル」

「・・・はい」

話をするレイチェルも辛かっただろう。疲れた表情で頷いた。

「そうか」

「・・・辛かったな」

エアニスはどう声をかければ良いのか分からなかったの、素直に自分の思ったままを言葉にした。普段のように、ふざけたり、茶化したりする余裕が無くなった時にしか出ない、エアニスの本当の言葉だった。

その言葉を聞くと、レイチェルは顔を伏せ、声を殺して泣き始めた。

「おい！ちょっと・・・！」

「あー、エアニス女の子を泣かせるなんて最低ですねー」

からかうトキの言葉にさらに慌てるエアニス。

「違うだろ！？俺のせいじゃないだろ！？」

狼狽するエアニス。トキのアオリも受けて、本当に自分が泣かせてしまったような気分になってきた。

「あぁもう、休憩だ！！お前ら外出てアタマ冷やして来いっ！！」

「あっ、ちょっと待ってよっ！」

ばたん。

エアニスは二人を立たせて、無理矢理家の外へ追い出してしまった。



戸を閉めて、エアニスはトキに振り返る。

「さてと、大変な事になっちまったな・・・」

お前、どうするんだ？」

慌てふためいていた顔とは一変、真面目な顔でトキに問いかける。

「僕にも関係の深い話ですけど、"石"については、エアニス。あなたの方が他人事ではないんじゃないですか？」

今から二年半前。

まだ世界が戦火の渦にあった頃。

エアニスは前回の"石"の争奪戦に関わり、エルカカ側の人間として戦った事があったのだ。だがそれはあくまでエルカカの為ではなく、ましてや世界平和の為でもなく、ただ"石"を守る事が自分の大切な人を守る事に繋がっていたから、エアニスはエルカカに力を貸していたのだ。

その時に、レイチェルの父親、シャノンにも出会っていた。ひょっとしたらその時にレイチェ

ルと会っているかもしれないが、それはエアニスの記憶に無かった。

ただ、エアニスはこの話を改めてレイチェルにするつもりは無かった。二年半前の事を話すと、必然的に自分の過去を話さなくてはならなくなるからだ。それは嫌だった。

「別に俺が昔"石"を守ってたのは、石が大事だから守ってた訳じゃない。ただの成行きだ。今回だって、レイチェルの持つ石がどうなるのが、正直知ったことじゃない」

トキはエアニスの過去を、大雑把ではあるが当人から聞いていた。エアニスが世界の為に戦うといった立派な人間ではない事も知っているのだから、それは最もらしい意見だと感じた。

「じゃあ、ほっときますか？」

淡泊な口調で問うトキに、ガジガジと頭をかきながらエアニスは答える。

「放っといたら、あいつら殺されるだろ。さっきの話を聞いた以上、そればっかは寝覚めが悪い。

悪すぎる。

まあ、その・・・手助けする理由はそれで十分なんだけどな」

にっこり、とトキがいつもの笑顔を見せた。

「それにあいつの父親には、二年半に世話になったし、迷惑も掛けたしな。

いつか借りを返さなきゃと思っていたのに・・・連中のお陰でそれも出来なくなっちゃった。その礼はさせて貰うさ」

軽い口調ではあったが、その事実がエアニスにとって一番アタマに来ていた事だ。たとえ相手がどれ程巨大な存在だろうと、仲間や友の仇は必ず取る。許せないと感じた相手は必ず潰す。相手が街のチンピラだろうが犯罪組織の首領だろうが、自分の感情を押し込めたりなどしない。エアニスの中で最も強気に働く、彼の行動原理だ。そのお陰でエアニスは今も昔もトラブルが絶えないのだが。

「で、俺なんかより、お前はどうするんだよ」

エアニスが話題の中心をトキに戻す。

見方によっては、この問題はエアニスよりもトキの方が因縁深いのかもしれないのだ。

トキは目を伏せ溜息を吐いた。いつもの様な芝居がかった仕草ではなかった。

「・・・全く、これは何の因果なんでしょうね・・・」

それについてはエアニスも同意だった。神様のお導きか運命の悪戯かは知らないが、出来すぎている。

エアニスはトキと同じような溜息を吐いて、言った。

「まあ、お前がルゴワールに居た事は、レイチェルには黙っていた方がいいな」

トキは、何も答えなかった。

「まだ組織を抜けて一年半程度だろ？」

まだお前の事を探している奴も居るかもしれないのに、ルゴワールとやり合っても大丈夫なのか？」

トキは俯き、珍しく神妙な面持ちで自分の考えを語る。

「さっきの話を聞いて、正直いい切っ掛けだと思ったんです。

傷も完全に治りましたし、そろそろ逃げ隠れするのも終りにしようかな、とね。

・・・あ、僕のせいで皆さん迷惑をかける事は無いと思いますよ。僕一人の事より、"石"の方がルゴワールにとって重要な問題でしょうからね。むしろ、各地の拠点や幹部の顔を知っている分、役に立てると思いますよ。

腕も、まあそれほど鈍ってはいないでしょう」

昨日の感覚を思い出しながら、トキは言った。銃を撃ったのは何ヶ月ぶりだったろう。

「その辺は心配してないけどさ・・・」

どう訊いたものか。少しだけ逡巡した後、エアニスはやはりストレートな言葉で問うことにした。

「仇、取りにいくつもりか」

「ええ」

エアニスが一番聞きたかった答えは、たった一言で返ってきた。

「先に言っておきますが、手を出したら許しませんからね」

「わーってるよ」

肩をすくめるエアニス。とにかく、トキもルゴワールと戦う覚悟はあるようだ。

「レイチェルにお前の素性を隠し通せると思うか？」

「・・・いずれバレてしまうでしょうが、今は黙っておきましょう。今それを話す事に何のメリットもありませんからね。

それに、別に隠すというつもりはありません。ただ、今は話す必要が無いというだけです。機会と必要性があれば、大人しく全てを話しますよ。エアニスも、無理に隠そうとしなくても結構です」

トキの姿勢は状況任せのいい加減なものだった。それでもやはり、それは間違いなのだろう。無駄とは知りつつも、エアニスはトキに念を押す。

「いいのか？ 話すのが後になるほど、あいつを傷つける事になるかもしれないぞ？」

エアニスの言葉にトキは口ごもり、そして観念したかのように言う。

「嫌なんですよ・・・。

僕たちの過去は進んで人に話したくなるような物でも無いでしょう」

トキは正直に答えた。その言葉にエアニスは反論できずに苦笑を浮かべる。エアニスも、トキと同じ理由でレイチェルに二年半前の出来事を話したくはなかったからだ。

「お前、昨日の朝食のとき、俺が昔と変わった様に見えない、とか言いやがったよな？」

「・・・さて。そうでしたっけ？」

トキは白々しくとぼけて見せる。もっとも、エアニスもこの話をした時は言葉の真意を汲みつつも、しらを切ってしまったが。

「お前も俺も全然変わってないよ。未だに過去を引きずっている。

忘れられる訳が無い。まだ変っちゃいけないんだろ・・・  
やっぱり、俺もお前も、これで終りにするのは駄目なんだ」  
トキは目をつむり、小さく頷いた。  
対してエアニスは、ニッと粗暴な笑みを見せる。  
「隠遁生活は終りだ。思い切り暴れてやろ一ぜ」



一方、家の外に追い出されたチャイムとレイチェル。  
薪の束に腰掛け、レイチェルは涙を拭いていた。  
「大丈夫・・・？」  
心配そうに声を掛けるチャイム。話を聞く限りでは、レイチェルは気が触れてもおかしくない悪夢を見てきたのだ。彼女はその現実を受け止め、今まで気丈に振舞ってきた。レイチェルのしっかりとした物腰に慣れてしまっていたが、きっと今まで無理をして来たのだろう。チャイムはレイチェルの内心に気づいてやれなかったのかもと、少し悪い気がしていた。  
「私、また迷惑かけてるよね・・・」  
涙を拭いながら、レイチェルが言った。  
「私のやらなきゃいけない事なのに、関係の無いチャイムを巻き込んだ上、また人に頼ろうとしてる・・・」  
「ばか。私たちが何とか出来る事じゃないでしょ。  
それに、何でか知らないけど、あいつら乗り気だから気にする事ないわよ」  
「でも・・・」  
「アイツも・・・エアニスも言ってたじゃない。  
"自分の手に負えないものを一人で背負い込むのは馬鹿だ"って。  
今の私達には、信頼できる協力者を探す事が必要だわ。  
事情はさっき話したし、それでもあいつらが付き合ってくれるんだったら、レイチェルがそれを悪いと感じる事は無いと思う。  
あんまり一人でしょいこまないのっ」  
釈然としないレイチェル。その通りなのだが、迷惑をかけている事には変わりはない。自分は、己の身に起こった事をありのままに話す事で相手の同情を誘い、協力を断りにくくしているのではないだろうか。チャイムも同じ理由で、自分に仕方なく付き合ってくれているのではないだろうか。そんな事すらも考えてしまう。  
「迷惑かけて悪いと思うんだったら、あんたが今へこんでる場合じゃないんじゃない？  
この旅の中心はレイチェルなんだから。私達がどうすればいいのかしっかり指示して、自分と"石"をルゴワールから守る事を考えなきゃ。ねっ？」  
元気付けるよう微笑みながらレイチェルの顔を覗き込む。レイチェルもつられるように微笑む。

「エアニスさん達、協力してくれるかな・・・」

「してくれるよ、きっと」

確証も根拠も無いが、そんな気がしていた。

「・・・よしっ。部屋戻ろっか」

「・・・うん」

すなわち、エアニス達に事情を知った上で協力してくれるかどうか、最後の答えを聞きに行くという事。

もし断られた事を考えると、エアニスの返事を聞くのが怖くなってしまった。



「おい、まず何処に行けばいいんだ？」

部屋に戻るなり、そんな事を聞かれた。

テーブルには地図が広げられており、トキが難しい顔で地図に何かを書き込んでいる。

「・・・え・・・その・・・」

レイチェルが恐る恐る問いかける。

「協力、して頂けるんですか・・・？」

「今更何言ってるんだよ。そんな話聞かされて、放っておけるか」

「まあ、僕達にとっては利のある話のようですから、協力させていただきますよ」

今度は喜びの涙を浮かべるレイチェル。そのまま何も言わずに、深々と二人に頭を下げた。チャイムも安堵の息を吐いて、笑った。

「・・・で、どこに行けばいい??」

レイチェルの気持ちに構う素振りをみせず、淡々と話を進めようとするエアニス。レイチェルも慌てて地図と向き合う。

「その、詳しくは・・・話せませんが、バイアルス領のバイアルス山脈北側に、石を封印する神殿があります」

レイチェルは言いにくそうに、曖昧な場所を指し示した。

「わかった。詳しい場所はバイアルス領に入ってから聞こう。とりあえず、バイアルスまでのルートは・・・」

エアニスはレイチェルの意図を汲み、あえて詳細な場所まで聞こうとはしなかった。

「ねえ、レイチェル。あたしもバイアルスの何処かって事しか知らないんだけど、詳しい場所も教えておいた方がいいんじゃない？」

エアニスの配慮をぶち壊すようにチャイムが言葉を挟んだ。

「えっと、それは・・・」

予想通りレイチェルは言葉に詰まる。やれやれ、といった口調で、エアニスはチャイムに向き直る。

「チャイム。お前、もし連中に捕まって拷問にでもかけられたら、レイチェルから聞いた場所

を黙ってられる自信あるか？」

「う」

ここで初めてレイチェルの意図に気づき、言葉に詰まるチャイム。同時に、そういう相手を敵に回しているのだという自覚が足りない事に気付かされた。

「って事だ。別に今知る必要は無い。ココからバイアルスは結構遠いからな」

最も、エアニスとトキには捕まるつもりも秘密を喋るつもりもさらさら無いが。

それに、話によると石の封印場所はエルカカの民の中でもエレクトラの直系の子孫にしか伝えられていないと言う。その秘密を出会って一日そこらの相手に話すのは抵抗があるのだろう。

今はバイアルス領に向かという事で十分だ。封印を行う神殿とやらの場所は旅の途中でレイチェルの信用を得てから聞けばよい。

コツコツ、と地図をペンで叩き、トキが提案をする。

「バイアルス山の北側にら、海路でアスラムへ渡り、南下した方が良いかもしれませんね」

チャイムが驚きの声を上げる。

「それって、超遠回りじゃない！

ここから真っ直ぐ北へ向かえば一ヶ月ちょっとで到着するのに・・・」

「リビス」

こつん、と、トキが地図の地名の一つをペンで指した。

「レオニール、アルムディム、バルハラ、ハルフト」

「・・・・・・・・??」

トキは次々と地図を指して地名を挙げていく。その全ては、このミルフィストからバイアルス領の間にある地名だ。

「それが・・・何よ？」

「すべて統治者がルゴワールと強く関わりを持つ国です」

チャイムとレイチェルは言葉を失った。

「彼らの力なら、僕達を犯罪者に仕立て上げて、憲兵隊や軍に探させる事くらいは出来ますからね。

ルゴワールだけを相手にするのならともかく、ルゴワールに協力している国家を相手にするのは、流石に無理があります」

話しながらトキは地図に線を引く。

「それよりも、ここから海路でアスラムに渡り、陸を南下してバイアルス領に向かえば、道中ルゴワールの息のかかった国を通る事ははありません。このルートなら、彼らから見ればかなり刺客を送りづらい場所だと思いますよ」

もちろん、全く刺客に襲われる事は免れないだろうが、少なくとも国に犯罪者に仕立て上げられたり、泊まっている宿に軍隊が突入してくるといった事はないだろう。

そういった大きな行動が取れない以上、相手は少数精鋭で攻めてくる筈だ。それならば、たった4人でも巨大な犯罪組織に対抗する術はいくらでもある。それがトキの考えた作戦だった。



「それに山脈の北側が目的地ならば、ここからだバイアルス山を越えなければなりません。標高6,000m級の山々が何処までも続く山脈ですので、生身での山越えは不可能です。飛空艇が定期的に運行されては居ますが、ここもルゴワールの手が伸びる可能性が高いでしょう。やはり、僕の場合のように最初に船で山脈を迂回するという手が最善かと」

「そうかもしれないけど・・・これじゃバイアルスまで半年はかかっちゃうじゃない」

「そこは心配するな。車を使えば、このルートでも2ヶ月程度の旅で終われるさ」

「・・・」

「車、持ってるの・・・？」

「ああ」

どこか呆れたような表情で問うチャイムに、エアニスは何も無げに頷く。

エアニスの家の半分を占める納屋に、その車が停まっていた。

街で良く見かける軍隊のトレーラーに似た、小さなバスのような車だった。4人乗っても十分にゆとりがある大きさだ。車の他にも納屋には何に使うのか分からない機械部品や、分解された車のエンジン、バラバラになったバイクなどが乱雑に並んでいる。どれもこれも、普通の生活をしている人間には見かける機会の無いものばかりだ。

ごん、とエアニスは車を叩く。

「DEM社製、マロード・タイプII。外装は全て防弾仕様、ガラスもだ。燃料はガソリンだが、魔力を動力原に代用する事も出来る」

いよいよ現実感が無くなって来た。

「ねえ・・・あんた達一体何者なワケ？」

「どこかの秘密結社のスパイか何か??」

こめかみに指を当てて唸るチャイム。車など、国の軍隊か、比較的大きな企業しか所有出来ないものだ。エアニスたちは普通では無いと思っただけに、まさかこんな物まで持っているとは思わなかったのだ。

「そんなに金がかかってねーよ。どれもこれも街から少し離れた戦場跡で拾ったスクラップだ」

「エアニスはガラクタ集めと機械弄りが趣味なんですよ」

趣味にしてはお金がかかりすぎているし、修理部品だって簡単に手に入る物ではない。

「ここだけの話、戦争中に荒稼ぎしてな。金には困ってないし、けっこう恨まれる事もしてきたから、いつでもドンパチ出来る用意はしてあるんだ」

言いながら床板を外す。すると今度は床下から機関銃などの大型銃火器が何丁も出てきた。

チャイムは思わず立ち眩みを起こしてレイチェルによりかかった。

「ごめん、レイチェル・・・」

「あたし達とんでもない奴に協力頼んじゃったかも・・・」

「・・・・・・・・」

レイチェルは固まって言葉も出ない。

「資金も物資も十分だ。事が"石"に絡んだ事なら、ここにある物を惜しまず使え。俺達も"石"とお前達を守る事に出来る限りの事はするよ」

エアニスは車に背を預けながら言う。

「でも・・・どうしてここまでしてくれるんですか・・・？」

レイチェルがそう思うのも無理はないだろう。もうこれは親切の域を超えている。知り合っ間もないのに、ここまでしてくれる事に疑問を感じるのは当然の事だ。

「・・・金も有り余ってるし、時間ももて遊んでる。

お前の事情を聞けば、奴らのやり方にムカッ腹が立った。

バイアルスの山は昔から一度見てみたいと思ってたし・・・。

何より最近、暴れてない」

宙に視線を漂わせ今感じている事を順に並べていくエアニス。

「不謹慎だとは思いますが、楽しそうだからってのもあるんだ。

昨日やり合ったあのバルザックって野郎、かなりの腕で久々にゾクゾクしたよ」

笑いながら言うエアニスに眉をひそめるレイチェルたち。どん引き、である。命の取り合いを楽しいと言うのは、まともな感性では無い。

「まあ、それ以外にあんたの話を聞いて、俺もトキも色々思う所があってな」

「思う所、ですか？」

エアニスは悪戯っぽい笑みを浮かべて言う。

「ま、その辺りの事は、追々気が向いたら話してやるよ」

「話を戻すが、ルートや移動手段は、さっきトキが提案した方法で文句は無いな？」

思い出したかのように、チャムとレイチェルが顔を合わせる。

「・・・私なんかより、トキの方がこういうのに詳しそうね。あたしは異論ないわ」

その言葉を聞くと、レイチェルはエアニス達に頭を下げる。

「宜しくおねがいします！！」

「ああ、まかすとけ」

親指を立てて笑うエアニス。そんなキャラでも無いんだけどなあ、と思うが、こちらがテンションを上げていかねばレイチェルが申し訳なさそうにするので仕方ない。意外と気遣い出来てるんじゃないかなと自賛するエアニス。

「では、早速用意をしておきます。街で買っておく物もありますので、出発は明日の昼ごろで宜しいですか？」

トキの言葉に3人は力強く頷いた。



ベッドに潜り込み、安堵の息と共に目を閉じるレイチェル。目前の不安が消え去り、随分と穏

やかな気持ちになっていた。彼らと出会うまでは何もかも不安で、まともに眠る事すらも出来なかったというのだ。

唯一気になる事と言えば、何故彼らはここまでしてくれるのかという事だった。

それに、エアニスの"色々と思う所がある"と言う言葉も気になった。

そういえば、エアニスは以前エルカカに立ち寄り、レイチェルの父に会った事があると言っていた。

その時、心と彼女の脳裏に昔の記憶が蘇った。

あれは確かレイチェルが13歳か、14歳の頃だった。その日、レイチェルの父は村の外の間を家に招き入れたのだ。

レイチェルは眠りに落ちる狭間で、あの日見た情景を思い出す。

栗色の髪の少女と、髪の長い青年の二人。その二人と向き合い、レイチェルの父は何かを話していた。顔は、よく思い出せない。

レイチェルはそのうちの一人、髪の長い男の後姿を思い出す。その後姿はエアニスに似ているような気がした。

でも、違う。その髪の長い青年は、エアニスではない。

レイチェルはその青年と目が合った時の事をよく覚えている。静かな深海を覗き込んだような冷たい瞳。

しかし、それはモノを見ているかのように冷たく、無感情な瞳だった。レイチェルは彼にそんな目で見つめられた。それはエアニスとは似ても似つかないものだった。

それにレイチェルが見た青年の髪は、鈍く輝く銀糸の髪だった。エアニスのようにくすんだ琥珀の髪では無い。それはとても綺麗だったので、良く覚えている。

思い出せば思い出す程、それは全く関係のない思い出のような気がしてきた。

(考え過ぎね・・・)

レイチェルはそこで考える事を止め、眠りに就く事にした



翌日。

エアニスの家の前で、チャイムは自分の大剣の柄革を巻き直していた。その横で、レイチェルは自分のマントのほつれを気にしている。

「そいえば最近、慌しかったから身の回りの物を手入れする暇無かったね」

「そうねえ。あたしも柄革新しくしないと、もうボロボロだわ。」

「あっ、服のほつれも昨日のうちに縫っておけば良かったわね・・・」

自分の頭を叩くチャイム。

「入用な物があるなら、港街で買出ししておけばいい。俺達も買い物するからさ」

納屋から出した車を点検しながら、エアニスが言った

エアニスは昨日までの服装と違う服を着ていた。黒い首元まで覆う貫頭衣とゆったりとしたズ

ボンは同じだが、その上からローブのような服を羽織り腰布で纏めていた。胸元と足元は前で開けておりそこそこ動き易さは感じたが、剣士の服装というよりは魔導士のそれに近い。

「うん、そうしたいのは山々なんだけどね、ちょっと持ち合わせも心細くて・・・」

「昨日も言ったろ。金なら気にするな。有り余ってるからさ」

本当にどうでもよさそうな口調でエアニスは言う。思わず顔を見合わせるチャイムとレイチェル。

「でも、あまり世話になるのも悪いわよ。あたし達、何もお礼できないし・・・」

そこで、はっ、とチャイムが顔を上げた。

「あんたまさかっ、礼はあたし達のカラダで！とか言うんじゃないでしょうね！？」

自分の体を両手で抱き、チャイムはそんな事を言った。

彼女の冗談を聞いたエアニスは、とびきり馬鹿にしたような顔で、ヘッと失笑する。

がすっ！

間髪入れず、チャイムの投げつけた拳程の石がエアニスの腰にめり込む。エアニスはその場に崩れ落ち悶絶する。

「こ・・・この程度の事で・・・キレて人に向かって投石とか・・・」

腰を抑えながら息も絶え絶えに呻くエアニス。

「今のむかつく顔は赦せないッ！！」

それにオトシゴロの女の子がそこまで興味無さげな態度取られたらプライドが傷つくじゃないの！！」

「へえ、あっそう。別にいいんだぜ、そー言うお礼で 」

みなまで言わず、レイチェルの拳がエアニスをのけぞらせた。

「冗談に決まってるでしょーがっ！！ 何本気になってんのよ馬鹿変態っ！！」

「ど、どうしろっつーんだよ！！」

理解不能なチャイムの言動にエアニスは狼狽し、彼女から逃げ回る。

そんなやり取りを目を点にしながら見ていたレイチェルに、

「なんだか馬鹿な話でもりあがってますね」

「きゃあっ！！」

何の気配も無く、いつの間にかトキが隣に腰掛けていた。

「うわっ、いつ帰ってきたのよ！？」

「お前気配を消して近づく癖やめろよ！！」

「・・・僕そんなに存在感無いですかね？」

ズボンをはたきながら立ち上がるトキに、レイチェルが尋ねる。

「どこに行ってみえたんですか？」

「大学です。とりあえず、3ヶ月の休学届けを出してきました」

その言葉に驚くチャイム。

「そうじゃん、トキって、ミルフィストの大学通ってるんでしょ？」

3ヶ月も休んで・・・大丈夫なの？」

「ええ。こう見えても割と優等生なんですよ、僕。

一年くらい休んだって卒業できちゃいますから」

「へえ、そう・・・」

自慢しているつもりは無いのだろう。だからこそ、その余裕の表情が癪に障るチャイム。

「よし、じゃあ全員用意できてるな？」

ばむん、と車のトランクを閉め、気持ちを切り替えるように声を張るエアニス。

そろそろ、出発予定の時刻だ。

「あ、少し待っててください」

トキが駆け足で家に入り、すぐに荷物を持って出てきた。

その手には荷物のザックの他に、黒っぽいロングコートが抱えられていた。チャイムはトキに似合わないそれをめざとく見つけた。

「何その殺し屋みたいなロングコート？」

「えっ。・・・ああ、失礼ですねえ。まあ僕の旅装束みたいなものですよ。普段は袖を通しませんからね」

「ふうん」

するとトキはコートを折りたたみ、車のトランクへ荷物と共に放り込んでしまった。



「じゃ、行くぞ。家、鍵かけたか？」

「もちろん。不法侵入者に対する必殺の罠も沢山仕掛けておきました。僕達が帰ってくる頃には死体の山が出来ているかもしれませんね」

「解除してこい」

「冗談ですよ」

もはやエアニス達の非常識な会話に突っ込む気になれず、無言で後部座席に座るチャイムとレイチェル。因みに車は3列シートで、3列目のシートには使用頻度の高い荷物が纏めて押し込まれている。

トキが助手席に、エアニスが運転席に座り、車のエンジンに火を入れる。

ズロロロロウン・・・

低い排気音とともに車が揺れる。

「うわぁ・・・私、車乗るの初めてなんです」

ずっと山奥で暮らしていたレイチェルは、車がとても珍しいらしい。車の小さな窓越しに見える景色と、独特の振動、排気音を感じ、レイチェルはワクワクしながら言った。車の持ち主のエアニスとしては、悪い気はしない。

「さてと、それじゃあ・・・」

「行きますか」

エアニスの言葉をトキが続けた。

「改めて、宜しくお願いします」

「安全運転で頼むわねっ！」

後ろの席からレイチェルとチャイムも準備OKの合図を送る。

重い役目を背負った苦難の旅の始まりだというのに、二人の声は楽しげだ。

気楽なもんだな、と二人の態度に呆れるエアニスだが、その二人の笑顔は他ならぬエアニスとトキが与えた物なのだ。

それならば、この車の旅を少しでも楽しいモノにしてやろう。親切心によるものか悪戯心によるものか。エアニスはそんな事を思うと、アクセルを踏んで唐突にクラッチペダルから足を離す。

ゴギャッ！！

エンジンとミッションが唸り、車は後輪を滑らせながら急発進する。

「ちょっとっ・・・エアニスさん！！？」

エアニスの荒い運転に、レイチェルは思わず隣に座るチャイムの腕を握り締めた。周りの景色が激流のように流れてゆき、車が少し曲がる度に地面とタイヤの擦れる音が聞こえる。車とはこんなにも乱暴な乗り物なのだろうか。

「大丈夫、レイチェル？ 声震えてるわよ・・・。

てか。腕放して・・・爪刺さってて痛いんだけど・・・！

っつーかエアニス！！スピード落としなさいよ！！あんた運転下手過ぎ！！！」

「あははっ、エアニスは運転凄く上手いですよ。ただ乱暴で雑ですがね」

横Gに体を左右にぐおんぐおんと振られながら、トキは笑って言った。

「ちょっと急いで日が沈む前に港に入るぞ。出航の手続き今日中に済ませば明日の朝イチにアスラムへ向かって旅立てるからな」

車はあっという間に山の麓まで駆け降り、平坦な街道に出た所でエアニスは更にシフトノブを一段高いギアへ叩き込む。

小高い丘を飛び越えると車は宙に浮き、その浮遊感にレイチェルは悲鳴を上げた

レイチェルにとって初めてのドライブが良い思い出になってくれればいいな。そんな事を思いながらエアニスはハンドルを握り笑った。

ここから4人の旅は始まる。

チャイムとレイチェルにとっては、心強い仲間を得ての旅の再開。

そしてエアニスとトキにとっては、錆付きもう二度と動く事は無いと思われていた歯車が、再び廻り出した瞬間だった。

## キャラクター設定



### エアニス

年齢 : 21歳

身長/体重 : 168 c m 54 k g

特技 : 剣術、体術、射撃、運転&操縦

好き : 放浪、運転、バニラの煙草、クルミパン、寝る事

嫌い : 魔導の勉強、干し葡萄、巨大な虫

少々悪い目つきと、腰まで届く長髪が特徴の剣士。

普段から無愛想という事もあり、一見冷たい印象を与えるが、冗談も言えば、簡単な事ですぐに頭に血が昇ってしまうなど、見た目とは裏腹な少しいい加減な性格。

自分から口にしないが人とエルフのハーフであり、寿命も人間より長い。その割りに魔導の素質が無く、完全にその手の修練を放棄している。しかし、潜在的な魔力は並みのエルフと同じく、人間を上回っている。剣の腕に限っては右に並ぶ者がいない程の腕前で、戦争中は名を馳せたという噂。

戦争中は各地を旅していたが、戦争が終わってからは町外れの小屋に留まり、何もせずにゴロゴロしている。

トラブルメーカー。



## トキ

- 年齢 : 19歳  
身長/体重 : 175 c m 66kg  
特技 : 心理学、戦史、機械工学、電子工学、内燃気、etcetc...  
好き : 読書、料理、音楽鑑賞、人間観察、機械いじり  
嫌い : 特に無し (本人談)

現在はエアニスの家に住候をし、ミルフイストの大学へ通っている青年。  
町ですれ違っても全く目に止まらない風貌。性格は穏やかで大人びているが、エアニスに対しては時々辛辣な事を言う事も。  
自称19歳だが、振る舞いや出来た性格から、もっと年上に見られる事も。  
エアニスと同居しているのは、1年程前のとある事件が切欠で、それからなりゆきでエアニスの方に居付いている。  
かつては戦争にも身を投じていた事も。  
普段メガネをかけているが、目が悪いという訳ではないらしい。





## チャイム

年齢 : 19歳

身長/体重 : 162cm 47kg

特技 : 料理、絵画、歌、剣術(?)

好き : 掃除洗濯、買い物、読書、スモークサーモン、かたゆで卵

嫌い : 野宿、高い所、優柔不断な男

戦争が終わってからずっと目的の無い旅を続けている剣士。

楽天的思考で感情をストレートに表すタイプ。ムードメーカーであるのだが、自分の事はあまり話したがらない。優しい性格で世話焼き。そのせいで様々なトラブルに首を突っ込んでしまうが、剣の腕は大して良く無く逆に世話を焼かれる立場になることもしばしば。

学問や魔導の知識に何故か詳しい。

トラブルメーカー。



## レイチェル

年齢 : 17歳

身長/体重 : 157cm 41kg

特技 : 魔導、スポーツ全般、強運

好き : アクセサリー集め、長風呂、色々な町を見て回る事

嫌い : ピーマン、ニンジン、トマト、ネギ、セロリ、魚、パイナップル、ミルク等々 (偏食)

人里離れた小さな村で暮らしていた少女。

とある事件により旅に出る事になり、道中で助けられたチャイムと共に旅を進めている。

責任感が強く、真面目な性格。極度の世間知らず、かつ"天然"で、時折、世間ズレした行動でエアニスたちの度肝を抜く。

責任感の強さ故、自分を押し殺してしまったり、無理をしてしまう事も。家柄の為、子供の頃から魔導を学んでいるが、まだ一人前ではなく、時間があれば魔導書を読んで勉強をしている。武器は魔導とハンマーロッド。

魔導の素質も高いが、ハンマーロッドの扱いも一流であり、見かけによらず戦いの技術は高い。

## 世界観

一年半前まで世界中で戦争の起こっていた世界のお話。

戦争のを機に機械文明の発達が進み、剣と魔法と銃が混在しており、時代の変わり目に差し掛かっている。車、飛行船といったものも存在している。

まだ未開拓の土地が多く、町から出れば延々と草原と山々が続く。復興の只中にある比較的平和な世界。

時間は1日を24の時、60の分と秒で刻む。

言語は1つしか存在せず、この世界に言語の違いという概念は無い。

## 文明

町並みは国にもよるが、レンガ造りの家に土壁の家、丸太作りの家などが続き、街と街を繋ぐのは申し訳程度に馴らされた数本の街道。街に住む人々の生活は昔から変わっていない。

一般市民の交通手段は徒歩と馬車。車や鉄道といったものも僅かに存在するが、機械文明恩恵を受けるのは主に軍隊か、僅かな富豪のみである。

戦争の始まる前は魔導を中心とした精神文明であった。戦争後は積極的に機械文明を取り入れようとする国が増えてきているが、中には魔導を重んじる国も存在する。

今でも旅人が持ち歩く武器は刀剣類が中心。銃火器は軍隊が管理しており、一般人が持つ事は許されていない。戦争が終わって間もないため、新たな仕事、新たな生活を求める旅人が非常に多くなっている。

## 戦争

20年前にベクタという国が、隣国に侵略を図ったのが全ての始まり。大国の暴走は火種を世界中に振り撒き、数年のうちに全世界を巻き込んだ。破壊の為の機械兵器、魔道技術の発達に歯止めがかからなくなり、最終的には国同士の技術者狩りという皮肉な方法により戦火は収束してゆく。直接的な戦争終結の要因は各国の疲弊と、指導者の交代。開戦時の国の統治者は殆ど死亡しており、既に意味を無くしている戦争に現在の統治者たちが終止符を打った。

だが、あまりににも簡単なきっかけで終わった戦争に、疑問を持つものもある。

民族間の対立は未だ根強く残っており、未だに戦争が続いている国も僅かに残る。

## 種族

かつては沢山の種族が共存したとされているが、今は人とエルフのみしか存在していない。人とエルフ以外の種族が何故姿を消したのかは神話の中にしか記されていない。

だが、魔族、魔物といった種族は確かに存在していた。100年以上前に人間とエルフが絶滅に追いやったという確かな記録が残っている。

現在は人とエルフは共存しているが、基本的に人間の町とエルフの集落で別れている。人間がエルフの集落で、エルフが人間の町で住むという事は稀なことである。

エルフの寿命は種族により人間の5~10倍。成人までは人間と同じペースで成長し、強さ、賢さの最盛期に差し掛かると成長が止まり、寿命までその姿を維持する事ができる優れた種族。寿命が近づくと急速に老いていく。

## おとぎ話

誰もが聞いた事のあるおとぎ話。

250年前、まだ魔物という種族が跋扈し、人と敵対していた時代。エレクトラという名の一人の魔導師が、神から授かったとされる魔法の杖で、魔物達の国"レッドエデン"をこの世界から消失させた。消えた魔物達の国はどこかの異世界へ封印されて、この世界から完全に隔離されたとされる。

エレクトラの封印を逃れた魔族も、それから数年の間に人とエルフに駆逐され、この世界から完全に魔族は姿を消した。

しかし、今でも250年前の封印を逃れた魔族が潜んでいたり、長い年月が過ぎ、弱まった封印を破り、一部の力の強い魔族がこの世界に戻ってきているといった噂もある。

月の光を纏う者 - 1 -

<http://p.booklog.jp/book/26077>

著者：猫崎 歩

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/blah/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26077>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/26077>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ